

久保園遺跡2・席田青木遺跡4

－空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書－

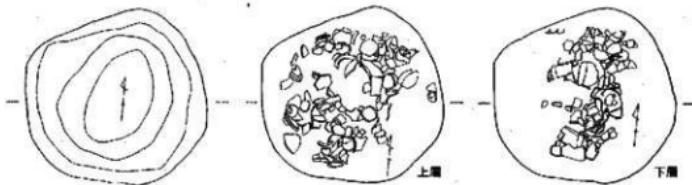
福岡市埋蔵文化財調査報告書第712集

2002

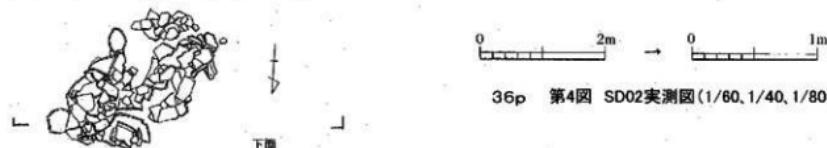
福岡市教育委員会

頁	行	誤	正
7	34	23~26、30~36、39は壺である。	23~26、30~33、35、36、39は壺である。
7	37	28、37は壺である。	28、34、37は壺である。34、37は同一個体の可能性がある。
26	第7図 34	器種: 壺	器種: 壺
36	第4図	第4図 SD02実測図	第4図 SD02実測図・SD02付近西壁土層実測図

図版の訂正



9p 第5図 SE03実測図(1/40)

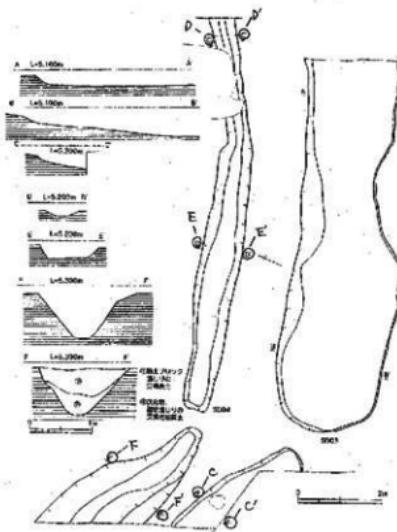


36p 第4図 SD02実測図(1/60, 1/40, 1/80)

15p 第10図 SD19-SD20-SD23土器窪実測図(1/60, 1/40, 1/30)



折り込み 第3図 調査区遺構配置図(1/150)

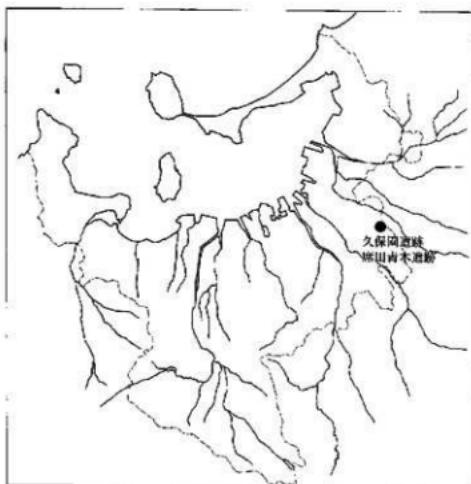


38p 第5図 SD03-SD04実測図(1/60, 1/40)

久保園遺跡2・席田青木遺跡4

—空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第712集



遺跡略号 KBZ-2 MAK-4
遺跡調査番号 0017 0026

2002

福岡市教育委員会

序

現在、福岡市はより活力のある住みやすいまちづくりの一環として、新たな交通体系の整備を進めています。本市の東を走する月隈丘陵も、福岡空港線・一般県道水城下臼井線の開通に伴う開発が行われていますが、ここは弥生時代から人々が生活し、多くの遺跡が残されているところです。

本書は、福岡空港線道路改良工事に先立って行われた久保園遺跡第2次調査、席田青木遺跡第4次調査を報告するものです。調査の結果、各調査地点で弥生時代から中世に至る遺構、遺物が発見され、当時の生活を復元する上で多大な成果を挙げることができました。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告に至るまで、本市土木局道路建設部東部建設第2課をはじめとする関係者の方々及び地元の方々には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに感謝の意を表するとともに、本書を文化財保護や普及、教育などに活用していただければ幸甚に存じます。

平成14年3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　　言

- 本書は福岡市博多区青木1丁目、東平尾1丁目地内における都市計画道路福岡空港線道路改良工事に先立ち、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が平成12年6月5日から8月17日にかけて発掘調査を実施した久保岡遺跡第2次調査、席田青木遺跡第4次調査の報告である。
- 検出した遺構については、それぞれの遺跡について、溝はSD、井戸はSE、ピットはSPとし、掘立柱建物、ピット以外は一括して通し番号を付した。
- 本書に掲載した遺構の実測は担当の井上蘭子の他、吹春憲治、桑原美洋子が、写真撮影は井上が、製図は谷直子、坂井かおり、牧野ミワ、井上が行った。
- 本書に掲載した遺物の実測は井上、谷が、製図は谷、坂井、牧野、井上が、写真撮影は井上が行った。
- 本書の執筆、編集は井上が行った。
- 本調査の出土遺物、記録類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので活用されたい。

遺跡調査番号	0017	遺跡略号	KBZ-2
調査地地番			
開発面積	1,160m ²	対象面積	552m ²
調査期間	2000年6月5日～7月3日	分布地図番号	22-0083

遺跡調査番号	0026	遺跡略号	MAK-4
調査地地番			
開発面積	1,160m ²	対象面積	833m ²
調査期間	2000年7月6日～8月17日	分布地図番号	22-0080

目 次

はじめに

1. 調査に至る経過.....	1
2. 調査体制.....	1

遺跡の立地と環境

本文目次

1. 久保園遺跡群・席田青木遺跡群の立地	2
2. 周辺の遺跡群.....	2
第1図 周辺の遺跡(1/25,000)	3

久保園遺跡群第2次調査

本文目次

I. 調査の概要.....	4
1. 調査地点の位置.....	4
2. これまでの調査.....	4
3. 調査経過.....	5
II. 調査の記録.....	6
1. 第1面の調査.....	6
(1)溝.....	7
(2)井戸.....	7
(3)その他の出土遺物.....	9
2. 第2面の調査.....	12
(1)溝.....	12
(2)河川.....	14
(3)その他の出土遺物.....	23
3. 小結.....	24

挿図目次

第1図 検査区位置図(1/500).....	4
第2図 久保園遺跡群調査地点位置図(1/4,000)	5
第3図 第1面遺構配置図(1/100).....	6
第4図 SD01-S D02実測図(1/60,1/40).....	8
第5図 SE03実測図.....	9
第6図 SD02-S E03出土遺物実測図(1/4).....	10
第7図 SE03出土遺物実測図(1/4).....	11
第8図 その他出土遺物実測図(1/4).....	12
第9図 第2面遺構配置図(1/100).....	13
第10図 SD19-20, S D23土器溜実測図(1/60,1/40,1/30).....	15
第11図 SD19出土遺物実測図(1/4).....	16
第12図 SD20出土遺物実測図(1/4).....	17
第13図 SD23土器溜出土遺物実測図(1/4,1/3).....	19
第14図 SD23出土遺物実測図(1/4).....	20
第15図 SD21出土遺物実測図(1/4).....	22
第16図 SD21出土遺物実測図2(1/4).....	23
第17図 ピット・その他出土遺物実測図(1/4)	24

表 目 次

表1 遺構一覧表	25
表2 出土遺物一覧表	26

図版目次

図版1 1. 第1面全景(南から)	2. 第2面全景(南から)
図版2 1. SD01(南西から)	2. SD02(南西から)
3. SE03上層土器出土状況(東から)	4. SE03先細状況(東から)
5. SD19-S D20(南西から)	6. SD23土器溜(東から)
図版3 出土遺物実測図1	
図版4 出土遺物実測図2	

席田青木遺跡群第4次調査

本文目次

I. 調査の概要	32
1. 調査地点の位置	32
2. これまでの調査	34
3. 調査経過	34
II. 調査の記録	35
1. 遺構と遺物	35
(1)溝	35
(2)井戸	39
(3)土壙	39
(4)ピット・その他	40
(5)包含層	44
2. 小結	47

挿図目次

第1図 調査区位置図(1/500)	32
第2図 席田青木遺跡群調査地点位置図(1/4,000)	33
第3図 調査区遺構平面図(1/150)	折り込み
第4図 D02実測図(1/60, 1/40, 1/80)	36
第5図 S D03・S D04実測図(1/60, 1/40)	38
第6図 S E01実測図(1/30)	39
第7図 S K06・S K08・S P29実測図(1/40, 1/20)	40
第8図 S D02出土遺物実測図1(1/4)	41
第9図 S D02出土遺物実測図2(1/4, 1/2)	42
第10図 S D02・S K06・S K08・S P29出土遺物実測図(1/4, 1/3)	43
第11図 包含層出土遺物実測図1(1/4)	45
第12図 包含層出土遺物実測図2(1/4, 1/2)	46
第13図 包含層出土遺物実測図3(1/4)	48
第14図 包含層出土遺物実測図4(1/4, 1/3)	49
第15図 包含層出土遺物実測図5(1/4)	50

表 目 次

表1 遺構-観表	51
表2 出土遺物-観表	52

図版目次

図版1 1. 調査区南側全景(北から)	2. 調査区北側全景(南から)
図版2 1. S D02包含層(北から)	2. S D02包含層(北東から)
3. S E01(西から)	4. S D03・S D04(北から)
図版3 1. S D04(西から)	2. S D03(西から)
3. S K06(北から)	4. S K08(南西から)
5. S P29(南西から)	
図版4 出土遺物1	
図版5 出土遺物2	

はじめに

1. 調査に至る経過

2000年2月7日に福岡市上木局道路建設部東部建設第2課より、都市計画道路福岡空港線道路改良工事に先立ち、福岡市博多区青木1丁目、東平尾1、2丁目地内における埋蔵文化財の有無について事前審査申請が提出された。申請地は各々席田青木遺跡群、久保園遺跡群の隣接地であることから、埋蔵文化財群で敷地内における試掘調査を行った。その結果、青木1丁目地点では現地表面下約20～80cmで、東平尾2丁目地内では現地表下約70～100cmで黄褐色粘質土層上に遺構が検出された。

この成果をもとに協議を行い、工事が行われる範囲内においてはやむを得ず発掘調査を行い、記録保存を図ることとした。また、土木局道路建設部東部建設第2課との間に発掘調査及び資料整理に関する受託契約を締結した。発掘調査は、まず久保園遺跡第2次調査を2000年6月5日～7月3日の期間に行い、引き続き、7月6日～8月17日に席田青木遺跡第4次調査を行った。

2. 調査体制

調査委託 福岡市土木局道路建設部東部建設第2課

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 生田征生

調査統括 埋蔵文化財課長 山崎純男

調査第2係長 力武卓治

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

事前審査 灑本正志

調査担当 試掘調査 田中壽夫 中村啓太郎

発掘調査 井上嵩子

調査作業 伊藤美伸 乾俊夫 桑原美津子 高着一夫 志堂寺堂 柴田博 林厚子 吹春憲治

藤原直子 水野由美子 森本良樹

整理補助 谷直子(九州大学大学院)

整理作業 穴井加菜子 川田京子 桑野綾子 坂井かおり 佐々木涼子 藤信子 橋本麻里

牧野ミワ 山口とし子

その他、発掘調査に至るまでの条件整備、調査中の調整等について福岡市上木局道路建設部東部建設第2課の皆様には多大なご理解とご協力をいただきました。ここに深く感謝いたします。

遺跡の立地と環境

1. 久保園遺跡群・席田青木遺跡群の立地

久保園遺跡群、席田青木遺跡群は、ともに月隈丘陵上に立地する。月隈丘陵は四王寺山から派生し、開析を多く受けた地形を呈し、舌状丘陵や独立丘陵が多く広がっている。これらの丘陵上には弥生時代を中心とする墓地や集落、古墳群が分布する。月隈丘陵の西側には福岡平野が広がり、御笠川や那珂川が北流して博多湾に注いでいる。

久保園遺跡群は、月隈丘陵から派生している小丘陵の内の一つ、天王山の南側斜面に位置している。現在は東平尾公園野球場となっている。久保園遺跡群の南側には赤穂ノ浦遺跡群、大谷遺跡群、宝満尾遺跡群、丸尾古墳群が、やや離れた北東には貝花尾古墳群、新立表古墳群、中尾遺跡群、北ノ浦古墳群が分布する。

席田青木遺跡群は、久保園遺跡群の北側、月隈丘陵の北端付近に位置する。西側に開けた丘陵尾根上に広がり、標高20~41mを測る。

2. 周辺の遺跡群

月隈丘陵とその周辺には久保園遺跡群、席田青木遺跡群の他にも主要な遺跡群が多く分布する。まず弥生時代を中心に見ると、席田遺跡群としては、中尾遺跡、大谷遺跡、赤穂ノ浦遺跡、宝満尾遺跡が挙げられる。中尾遺跡は、弥生時代～古墳時代の堅穴住居址、掘立柱建物、溝等が検出された集落である。未製品の輝緑凝灰岩製石包丁が出土している。大谷遺跡は、弥生時代の堅穴住居址や溝が検出された集落であるが、弥生時代住居址内で小型鉄斧と吉銅製鋤先、第2次調査では中国船載鏡と考えられる鏡片が出土している。赤穂ノ浦遺跡は、弥生時代～古墳時代の堅穴住居址、掘立柱建物、柵などが検出され、大谷遺跡と同じく集落であるが、鹿の文様が施された横帯文網錦の鉢型が出土している。宝満尾遺跡では、甕棺墓、土壙墓が広がり、一基の土壙墓からは内行花文明光鏡が出土している。宝満尾遺跡の1km南には下月隈B遺跡、上月隈遺跡等の甕棺墓群が広がり、さらに2km南には上壙墓・石棺墓・甕棺墓が数多く検出された金隈遺跡が位置している。下月隈B遺跡、上月隈遺跡の近くには下月隈C遺跡が立地し、弥生時代～中世に至る水田址が検出されている。

西に日を転じると、福岡空港西側には、雀居遺跡が立地する。绳文時代晚期から古墳時代に至る大規模な集落跡、弥生時代～中世の水田址等が検出され、绳文時代晚期終末期の木製農具・工具のセット、小鋼錠の鋳造に使用する中子、祭祀用の組合式案や削抜式案が出土している。

古墳では、久保園遺跡の東側丘陵上を中心に、貝花尾古墳群、新立表古墳群、丸尾古墳群が分布する。貝花尾1号墳は、小型堅穴系横口式石室を主体部で持つ径12mの円墳である。2号墳は、墳丘は不明であるが、横穴式石室が主体部である。新立表1号墳は径10m以上の円墳で横穴式石室と推定される。丸尾古墳1号墳は、墳丘は不明であるが、主体部は堅穴系横口式石室である。2号墳は、径11~12mの円墳で、横穴式石室を主体部とする。なお皮袋形瓶が出土している。このように近接した丘陵にいくつかの古墳が分布しているが、古墳時代の集落としては、丘陵裾部の中尾遺跡、赤穂ノ浦遺跡、久保園遺跡で検出されており、古墳の被葬者との関連が問題となる。

以上見てみたように、月隈丘陵とその西側の平野部に分布する遺跡群は、それそれが弥生時代以降運動して展開してきたと推定され、このような歴史的展開に久保園遺跡、席田青木遺跡がどのように位置づけられるか、検討していく必要がある。



1 中山遺跡	9 赤堀ノ浦遺跡	17 下月隈C遺跡	25 影ヶ崎古墳群	33 麦野遺跡
2 上白井遺跡	10 宝満尾遺跡	18 上月隈B遺跡	26 特田ヶ底古墳群E群	34 井相田A遺跡
3 席田青木遺跡	11 丸尾古墳	19 立花寺B遺跡	27 鶴居遺跡	35 比思遺跡
4 中尾遺跡	12 宝満尾東遺跡	20 立花寺遺跡	28 那珂君休遺跡	36 那珂遺跡
5 新立義古墳群	13 下月隈天神遺跡	21 熊野古墳群	29 板付遺跡	37 五十川高木遺跡
6 貝花泥遺跡・貝花尾古墳群	14 下月隈A遺跡	22 金剛山古墳群	30 祐岡遺跡	38 井尻遺跡
7 大谷遺跡	15 下月隈B遺跡	23 金隈遺跡	31 仲島遺跡	
8 久保園遺跡	16 上月隈遺跡	24 影ヶ崎遺跡	32 井相田C遺跡	

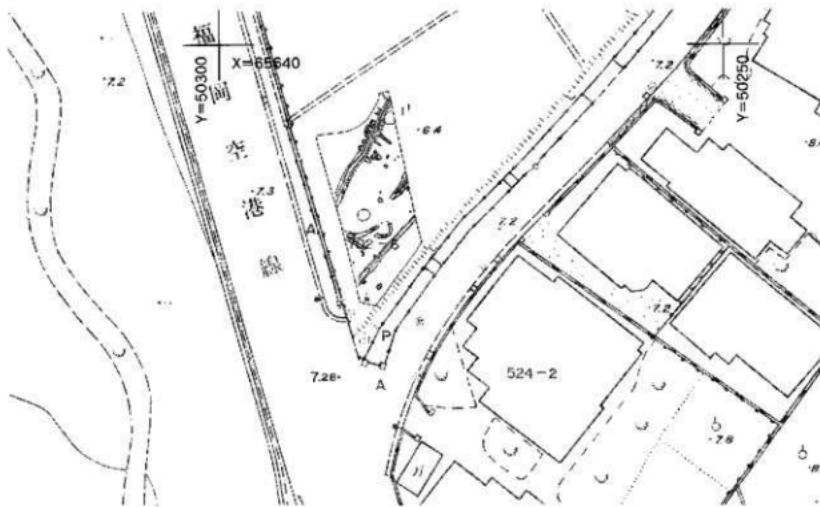
第1図 周辺の遺跡 (1/25,000)

久保園遺跡第2次調査

I. 調査の概要

1. 調査地点の位置

本調査区は、久保園遺跡群の北西に位置する。久保園遺跡は、月隈丘陵から派生している小丘陵の一つ、天王山の南側裾部に立地し、第1次調査地点は、現在東平尾公園野球場となっている場所に位置している。本調査区は、本来久保園遺跡群の範囲外であるが³、試掘調査の結果、現地表下約70～100cmで黄褐色粘質土層となり、遺構が検出されたため、久保園遺跡群の範囲を拡大した。調査区は大土山の西側裾部に位置し、遺構面は第1面が標高5.6～5.8m、第2面が5.1～5.8mである。



第1図 調査区位置図 (1/500)

2. これまでの調査

久保園遺跡群では今回が2回目の調査となる。第1次調査では、弥生時代～古墳時代の住居址、8間×5間の大型掘立柱建物等が検出されており、大規模な集落の存在が予想された。詳しく見てみると、住居址は、弥生時代中期中葉～古墳時代までの時期にわたるが、5軒のみの検出であり、集落のあり方に今後の検討が必要とされる。掘立柱建物は、桁行14.10m、梁行8.50～8.74mを測る大型のもので、出土遺物から弥生時代中期後半と推定される。さらに弥生時代の石棺墓、弥生時代中期後半～後期前半にかけての上器が廃棄されていた祭祀遺構と考えられる上器窓、13世紀頃の土壙墓などが検出されている。第1次調査の報告の中では、掘立柱建物や住居址、上器窓が祭祀的性格を帯びていると指摘しており、今後の調査と合わせて検討していく必要があるろう。



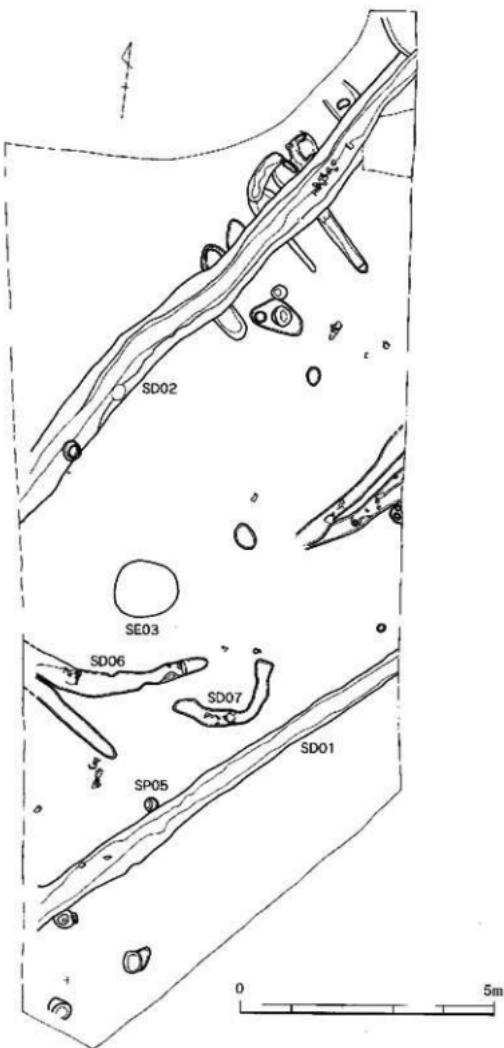
第2図 久保園遺跡群調査地点位置図 (1/4,000)

3. 調査経過

久保園遺跡第2次調査は、2000年6月5日にバックホーによる表土剥ぎから開始した。調査区は現空港線道路の東側に隣接しており、交通量も多いため調査作業には注意を要した。遺構面である黄褐色粘質土は現地表下約50~70cmで検出されたが、南から北へ向かい低く傾斜しており、調査区北側には包含層が堆積していた。そしてこの包含層上面にも遺構が検出されたため、一部の黄褐色粘質土層と包含層上面を第1面とし、調査を開始した。第2面はこの包含層を除去して黄褐色粘質土を完全に検出した面とした。調査区の北側で河川が検出されたため状況を確認するためにバックホーで河川の中央部分に試掘トレンチを入れたところ、深さが2mほどになり、弥生時代の土器、木材が多量に出土した。ところが、雨のために調査区の壁が崩壊し、道路際まで達したために急遽河川を埋め戻した。そのため河川はトレンチを入れたのみで完掘はできなかった。雨の多い季節で、調査区も深く冠水などのため調査作業も滞りがちであったが、7月3日に撤収、調査を終了した。

II. 調査の記録

1. 第1面の調査



第3図 第1面遺構配置図 (1/100)

表上、耕作土を除去した一部の黄褐色粘質土と包含層上面を第1面とした。標高5.6~5.8mである。黄褐色粘質土は調査区の南から北へ向かい低く傾斜しており、調査区の南半分には弥生時代遺物を含む茶褐色土が堆積していた。第1面の遺構はこの上面から掘り込まれていた。検出された遺構は、溝、井戸、土壤、ピットである。以下に主な遺構について述べる。

(1)溝

S D01(第4図)

調査区の南、黄褐色粘質土上面で検出された。東北東~西南西の方向に走る。幅0.45~0.75m、深さ0.18~0.28m、延長9.2mを測る。断面は逆台形を呈する。図示可能な出土遺物はなかった。

S D02(第4図)

調査区北側の包含層上面で検出された。北東~南西の方向に走る。幅0.7~0.85m、深さ0.06~0.44m、延長11.45mを測る。断面はY字形を呈する。出土遺物は少ない。

出土遺物(第6図1・2)

1は甕の底部である。底径5.8cmを測り、底部は厚く上底を呈する。弥生時代前期後半~中期前半であろう。2は瓶の把手である。図示できる遺物が少ないと、SD02の時期は限定できない。

(2)井戸

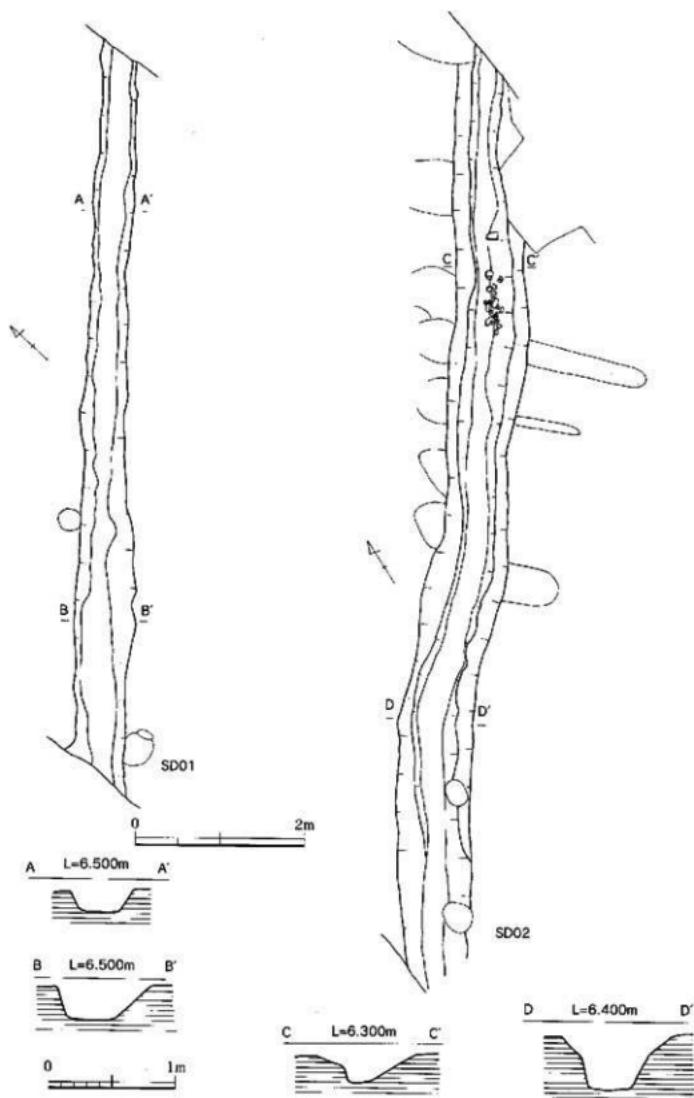
S E03(第5図)

調査区中央やや西よりの包含層上面で検出された。平面形は不整円形を呈し、壁はややすぼまって底部に至る。断面は逆台形を呈する。上端の径は1.2~1.25m、深さは1.1mを測る。古墳時代前期の上器が大量に投棄されていた。良好な一括資料である。

出土遺物(第6・7図3~39)

3~12は甕である。3~8、10は口縁部がやや内湾し、器壁は薄い。いずれも外面はハケメ、内面はケズリで調整されている。5はやや長胴になる。6、7は頸部に波状文が施され、6は胴部下半に穿孔がある。6、8は口縁端部が内側につまみ出される。9、11、12は口縁部がやや直線的に立ち上がる。10は外面をハケメで、内面をケズリで調整したのちナテ消している。11は外面、内面ともにハケメが施され、やや尖底を呈する。12は外面をハケメで、内面をハケメで調整したのちナテ消している。13は短頸壺の胴部である。外面をハケメ、下半部をケズリのち一部ナテ消している。内面をハケメのち一部ナテ消している。14、15は脚付きの鉢である。14は小型で、外面をハケメ、内面をハケメのちナテ消している。15は14に比べて大型で脚も大きく開く。16は高壺の脚部である。器壁は薄く、穿孔が施されている。17は小型高壺の脚部である。18は甕である。口縁部はやや開き気味に立ち上がり、頸部でく字状に屈曲し、胴部は大きく張る。外内面ともにハケメが施されている。19、20は朝顔形口縁を呈する甕の口縁部である。ただ19は器台である可能性も残る。いずれも頸部から口縁部にかけて屈曲し大きく開く。21、22は鉢である。21は甕の底部である可能性もある。22は丁寧な調整で仕上げられる。以上はSE03の上層出土である。以下で説明するのは下層出土のものである。

23~26、30~36、39は甕である。23、24、30、31、33、35は口縁部がやや内湾気味である。23~25、30、32は口縁部がほぼまっすぐ開く。26は他に比べて小型になる。33、35はやや大型になる。いずれも器壁は薄く丁寧に仕上げられる。23には胴部上半部に波状文が施される。ほぼいずれも外面にハケメ、内面にケズリが施されている。27、38は短頸甕である。28、37は甕である。口縁部は外側に開き、胴部は大きく開く器形である。外内面ともにハケメが施されている。29はミニチュア土器の鉢で



第4図 SD01・SD02実測図 (1/60, 1/40)

鉢である。

上層出土土器も下層出土土器も大きな時期差はなく、いずれも古墳時代前期である。器種構成としては、全体的に壺の比率が高く、その他、壺、鉢、高壺などがある。一部穿孔のある壺はあるが、特に祭祀的な意味合いのある土器はない。ミニチュア上器もわずかであった。ただ、一括性が高く、井戸の廻りに伴う祭祀行為が行われていた可能性は高い。

(3) その他の出土遺物

第1面は他に滑状縫構、土壙、ピット等が検出され、また、遺物が縫構面上に分布していた。ここではそれらの出土遺物について説明する。

S D06出土遺物 (第8図40・41)

40は大型の壺である。頸部に突帯が一条めぐる。口縁部がやや外反して開き、胴部はややすぼまる器形となる。外面にはハケメ、内面はハケメのちナデが施される。弥生時代終末であろう。41は器台である。胴部から底部へ向かいやや外反して広がる。外面にハケメ、内面にナデが施される。

S D07出土遺物 (第8図42)

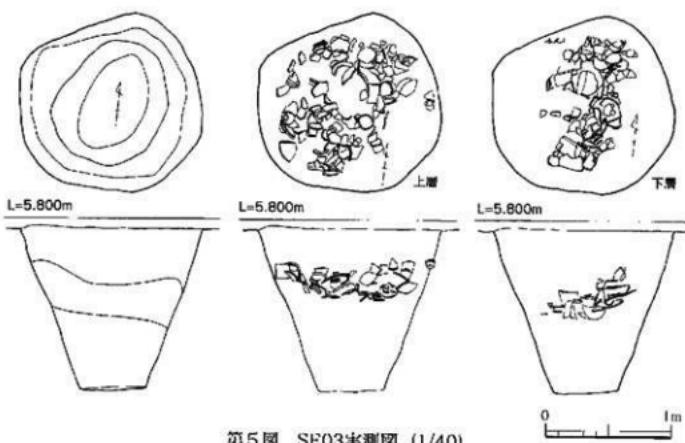
42は大型の鉢である。やや丸底の底部から口縁部へ向かって大きく外反する器形である。口縁部外面には縱方向のハケメが施され、口縁部内面には横方向のハケメが施されたあと、一部ナデ消されている。全体的に丁寧な作りである。弥生時代終末であろう。

S P05出土遺物 (第8図43)

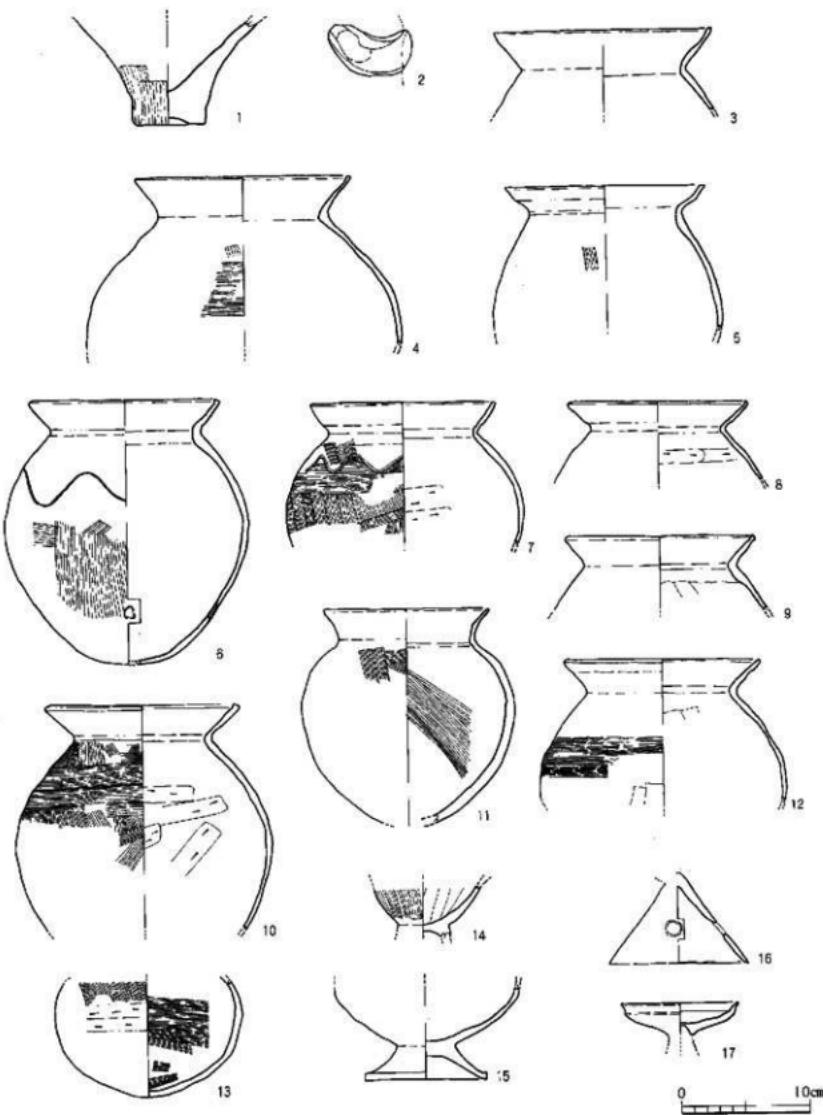
43は壺の底部である。底部内面に指圧痕が残され、内外面ともにハケメで調整されたあとナデが施されている。弥生時代中期か。

遺構面上検出の土器 (第8図44~49)

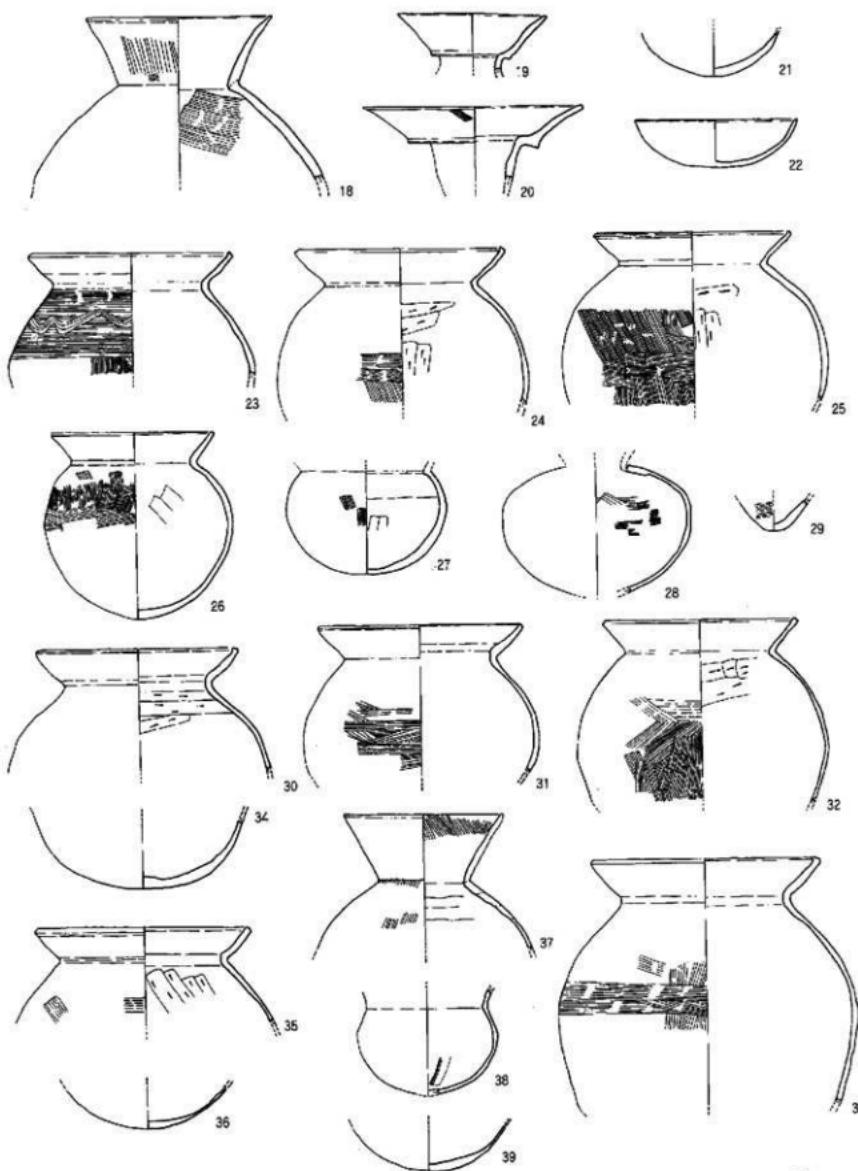
44~47は壺の底部である。44、46は若干上底で器壁が厚い。44は胴部が開き気味で外面にハケメ



第5図 SE03実測図 (1/40)



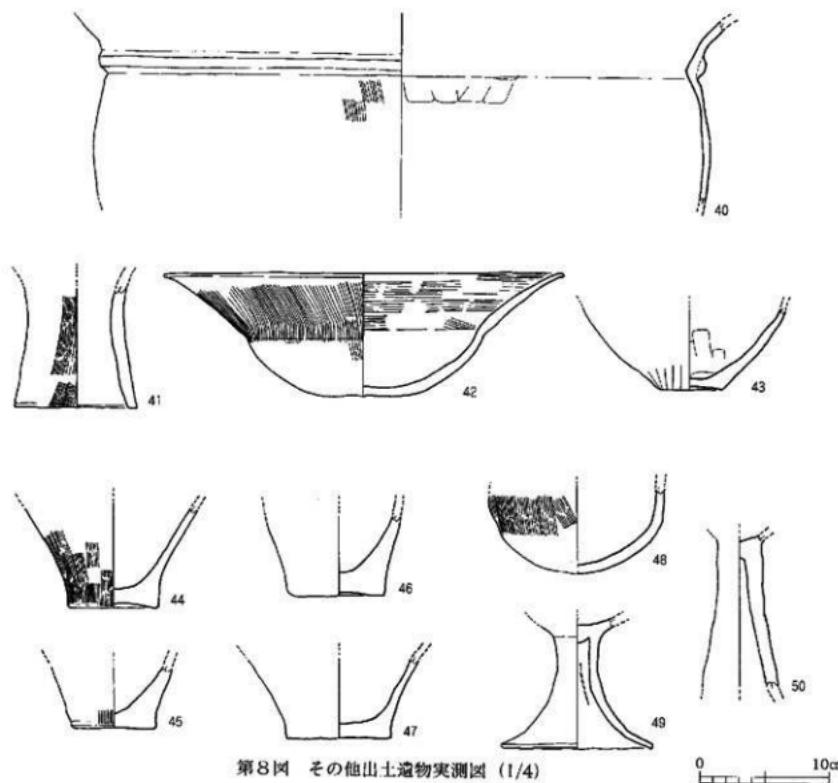
第6図 SD02 · SE03出土遺物実測図 (1/4)



第7図 SE03出土遺物実測図 (1/4)

0 10cm

が施されている。46は肩部がやすぼまる器形である。45、47は平底で45はやや器壁が厚い。いずれも弥生時代中期であろう。48も甕の底部であるが、丸底である。外面にハケメが施されている。古墳時代前期であろう。49、50は高环の脚部である。49は底部が大きく外反する。50は底部付近がハ状に広がるか。49は弥生時代後期頃であろうか。



第8図 その他出土遺物実測図 (1/4)

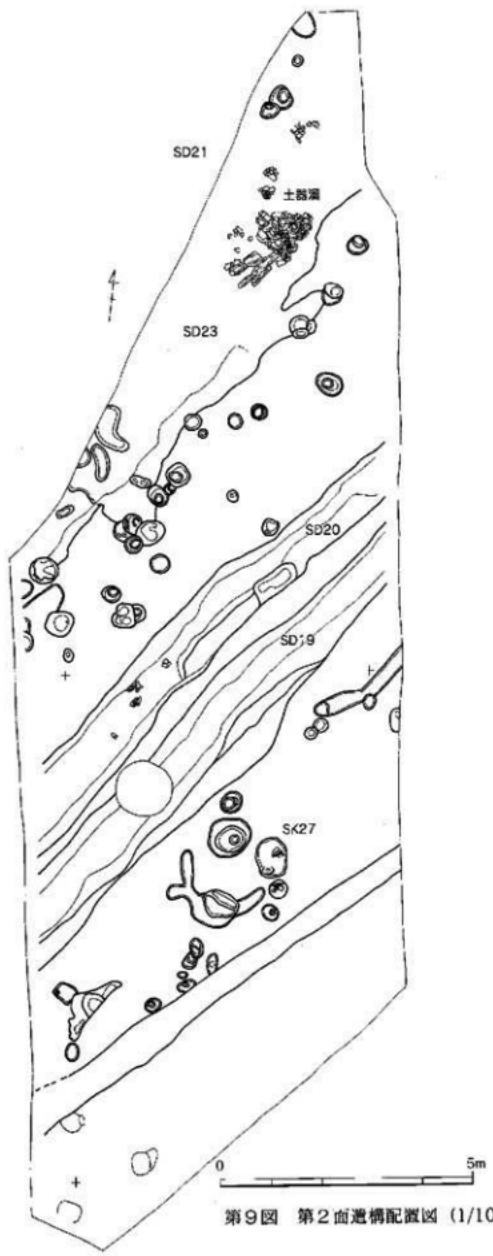
2. 第2面の調査

第1面上に堆積していた包含層を除去した黄褐色粘質土層上面を第2面とした。標高5.1~5.8mである。遺構面は調査区南側から北側へ向かい低く傾斜していた。検出した遺構は溝、河川、土壤、ビット等である。以下に遺構ごとに説明を加える。

(1)溝

SD19(第10図)

SD19はSD01の北側に検出された。SD20と接している。北東~南西の方向に走る。幅0.85~1.75m、深さ0.20~0.46m、延長11.8mを測り、断面は逆台形を呈する。弥生時代中期を中心とす



第9図 第2面遺構配置図 (1/100)

る上器が出土した。

出土遺物(第11図51~63)

51は甕の口縁部である。口縁部断面は逆L字形を呈し、口縁部下に断面三角形の突帯をめぐらす。器壁はやや厚い。弥生時代中期中葉頃か。52~58は甕の底部である。52、53は上底で器壁が厚い。外面にハケメが施される。54、56は少し底部が上底気味になる。54は外面とともにハケメのちナデ、56は外面にハケメが施される。55は平底で、外面にハケメが施される。いずれも弥生時代中期中葉~後葉か。57は器壁の薄い平底で、ナデで仕上げられる。58は平底で、胴部への開き具合から壺の底部の可能性も考えられる。弥生時代中期後半の範疇か。59は壺の口縁部である。頸部は大きく外反し、口縁部は鋲先状を呈する。弥生時代中期後半。口縁端部には未貫通の孔が施されている。60は小型の鉢である。底部から口縁部まで直線的に外反して開く。胴部に突帯が一条めぐる。61は高壺の脚部である。底部に向かい大きく開くと思われる。時期は不明である。62は大型の甕であるが、甕棺の可能性も考えられる。口縁部は鋲先状を呈し、口縁部下に断面三角形の突帯が一条めぐる。外面にハケメが施される。弥生時代後期初頭か。63も大型の甕としたが、甕棺であろうか。断面三角形の2条の突帯がめぐり、胴部は大きく張り出す。弥生時代後期初頭であろう。出土土器からSD19は弥生時代中期後半~後期初頭頃であると推定される。

SD20(第10図)

SD19の北側に接する。幅0.75~1.25m、深さ0.1~0.2m、延長10.8mを測る。SD20より浅く、ゆるやかな落ち込みとなる。底面に土器がかたまって検出された。

出土遺物(第12図64~75)

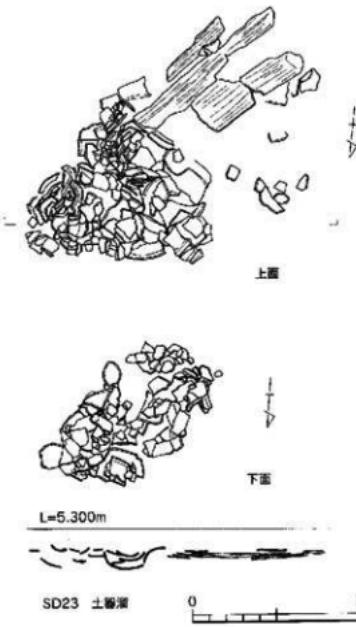
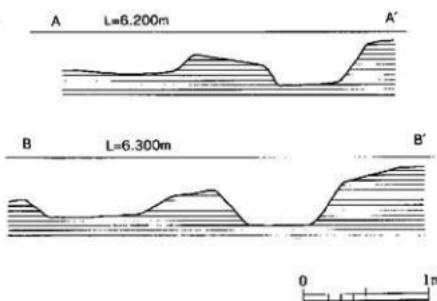
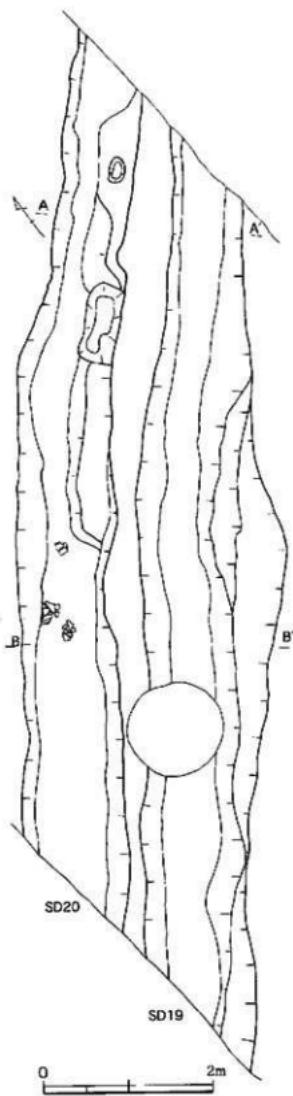
64、65は大型甕の口縁部である。甕棺の可能性もある。口縁部は鋲先状を呈し、口縁部直下に断面三角形の突帯を一条めぐらせ、口縁端部は平坦に仕上げる。胴部は大きく張る。内面に指圧痕が残る。65は鋲先状の口縁部を呈し、胴部は大きく張り、内面にハケメが施される。いずれも弥生時代中期中葉~中期後葉か。66、67は甕の底部である。66はやや上底、67は平底を呈する。67は外面にハケメが施される。68~70は小型広口壺である。68はやや丸みを帯びた口縁部からゆるいS字を描いて平底の底部に至る。外面はハケメ、内面はケズリのちナデ調整が施される。69はやや平坦に仕上げた口縁部からく字状に胴部へ外湾して続き、平底の底部へ至る。70は丸みを帯びた口縁部から大きく胴部へ張り出す。口縁部に穿孔がある。68、69は弥生時代後期前半頃、70は弥生時代中期~後期前葉頃か。71は甕の口縁部である。一部のみの検出であるが、鋲先状口縁を呈し、近接して2カ所の穿孔がある。弥生時代中期後半頃か。72~73は蓋である。72は近接して2カ所の穿孔がある。外面はナデで調整され、赤色顔料が施される。73も穿孔が見られ、外面にミガキの痕跡が残り、赤色顔料が塗布される。74も2カ所の穿孔があり、外面はミガキで調整され、赤色顔料が施される。弥生時代中期末頃であろう。75は紡錘車である。

甕や丹塗り磨研の蓋が集中して検出されたことから、なんらかの祭祀が行われていたとも考えられる。以上の遺物は弥生時代中期後半~後期初頭までの時刻範囲であることから、満の時期は上限が後期初頭と考えられる。

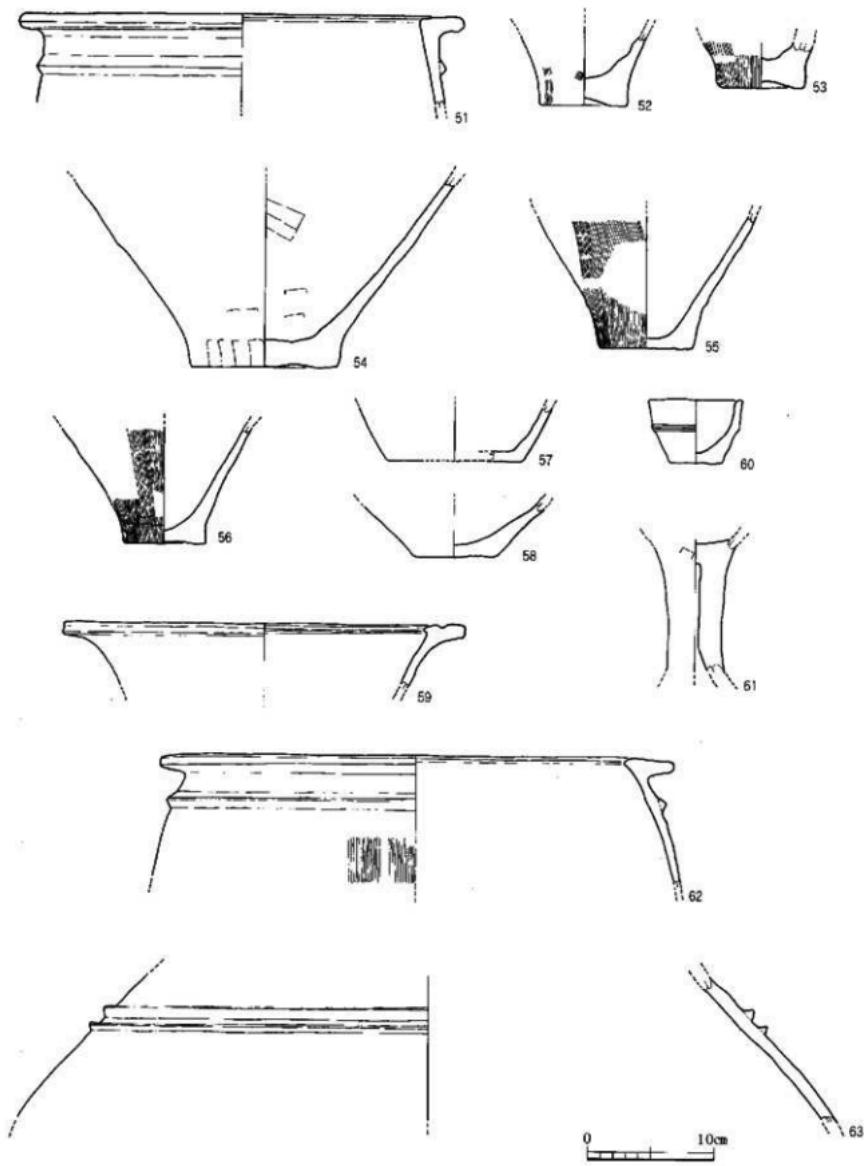
(2)河川

SD23土器層(第10図)

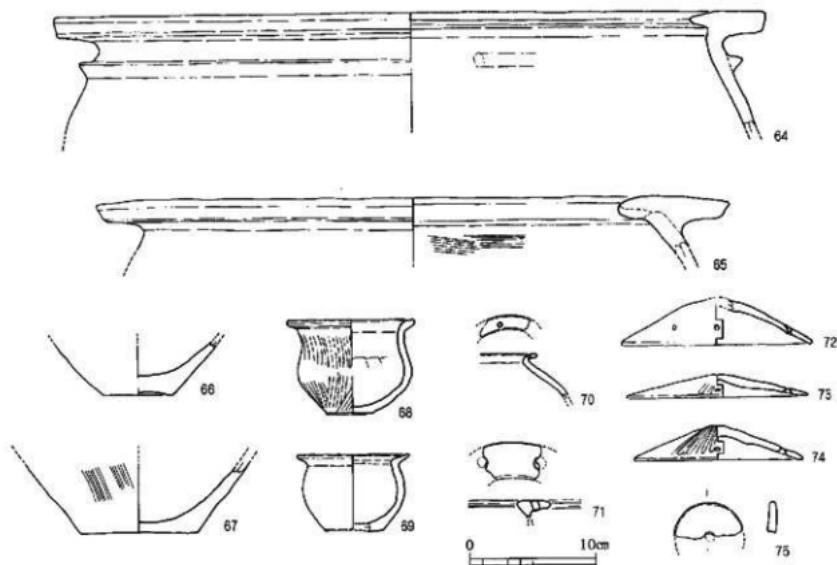
SD23は調査区の北側で検出されている。これはSD21と一連のものとも考えられるが、SD21を先に掘削中、道路際の壁が大きく崩壊し、安全のためSD21とSD23の一部をすぐに埋め戻したた



第10図 SD19・SD20・SD23土器層測図 (1/60、1/40、1/30)



第11図 SD19出土遺物実測図 (1/4)



第12図 SD20出土遺物実測図 (1/4)

め、その先後関係を検討することができなかった。ただ、調査区東壁際に掘削したサブトレンチの土層からは、SD21がSD23を切っている状況が伺えた。SD21に若干先行すると考えられる。SD23の上面に土器と木片が集中する箇所があった。炭化した木片の上に土器が折り重なるように投棄されて、祭祀行為の結果だと推定される。

出土遺物(第13・14図76~94)

76は甕である。口縁部は大きく字状に屈曲して開き、口縁部下に断面三角形の突帯が一条めぐる。外面にハケメ、内面には、突帯貼り付けの際につけられたと思われる指圧痕が残る。弥生時代中期末頃か。77は壺の胴部である。断面台形の突帯を2条めぐらす。胴部は下部の突帯から大きくふくらむ。弥生時代中期後半か。78は胴部の開き方から壺の底部と考えられる。上底で底部の内面はやや厚く、指圧痕が残る。79~81は甕の底部である。いずれも平底である。79は、内面にハケメの痕跡が残る。80は外面がハケメで調整される。底部に焼成後穿孔が施される。81の外面はハケメのあとナデで調整される。82、83、84は壺の口縁部である。82の口縁部は鈍先状を呈し、上面は平坦に仕上げられ、やや下がる。口唇部には太い凹線がめぐる。83は頸部から口縁部へゆるやかに外反し、口縁端部は平坦に仕上げられる。口縁部の内側はやや凸起が見られる。頸部と胴部の境目には断面三角形の突帯が一条めぐる。84は袋状口縁壺である。口縁部は内済し、口縁部下に断面三角形の突帯が一条めぐらされる。頸部はゆるやかに開き、胴部に至るのであろう。外面はナデで仕上げられ、内面はハケメ状の調整が施される。いずれも弥生時代中期末であろう。85は高壺の脚部である。壺に向かってゆるやかに開く器形である。外面はナデで調整され、内面はケズリのあとナデで仕上げられる。86は甕である。口縁部は逆L字状に屈曲するが、やや立ち上がる。胴部はふくらみ平底の底部に至る。外面は縱方向

のハケメが施される。弥生時代中期末であろう。87、88は甌の底部である。やや丸みを帯びた胸部から平底の底部へ至り、底部には穿孔、外面にはハケメ調整が施される。88は平底を呈する。89は石製の投弾である。

90、93、94は壺である。90の口縁部はゆるいく字状に外反して聞く。93、94は鶲先状口縁部を持つ。いずれも口唇部に太めの凹線をめぐらせ、口縁部上面に粘土の円盤を貼り付け、円形の浮文をしている。94は2カ所残存しているが、その位置から、3ないし4カ所の浮文があったと推定される。いずれも弥生時代中期末であろう。91、92は甌の底部である。91の外面にはハケメをナデ消した痕跡が残る。やや上底を呈する。92は外面にハケメが施され、平底を呈する。

76～85は土器溜の上面、86～105は下面出上であるが、土器の投棄状況に時期差はなく、一括遺物である。底部に穿孔が施された土器や壺が多いことなどから、祭祀的な性格を持つ土器溜であると推定される。詳細な時期を決められない遺物もあるが、大半が弥生時代中期末を示すものであり、この土器溜は弥生時代中期に行われた祭祀の痕跡であると考えられよう。

SD 23 その他の出土土器(第14図95～105)

SD 23で検出された、土器溜以外の遺物の説明を行う。

95～99は甌である。95は甌の上半部である。口縁部は鶲先状を呈し、上面は平坦に仕上げる。外面にタテハケを施し、内面はナデで調整する。弥生時代中期中葉頃か。98は口縁部がゆるく外反し、胸部からなだらかに底部へ至る。底部は平底である。外面にはタテハケが施され、内面はナデで調整される。弥生時代中期末か、後期初頭まで下るかもしれない。96、97、99は甌の底部である。96は平底の底部からやや直線的に胸部へ伸びる。外面にタテハケが施され、内面はナデ調整である。97は平底の底部から丸い胸部へ伸びる。底部付近の外面にはハケメ痕が残る。99も平底の底部と丸く張る胸部を持つ。器壁は薄い。外面にはタテハケが施され、内面はハケメで調整したあと、ナデ消している。

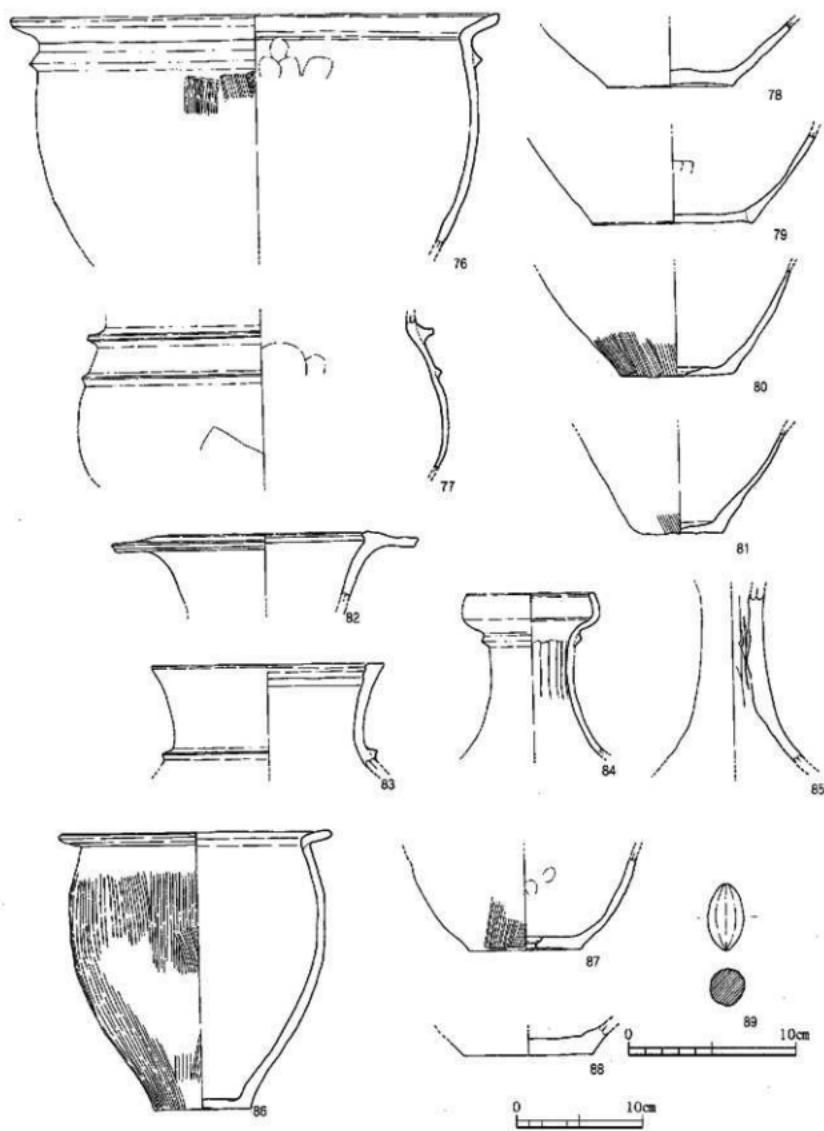
100は壺の口縁部である。口縁部は逆く字状にやや丸みを帯びて屈曲し、頸部と胸部の境目には断面三角形の突唇が一条めぐる。口縁部にはヨコハケを一部ナデ消し、頸部はタテハケを一部ナデ消している。内面にはヨコハケが施される。これも98の甌と同じく断定はできないが、弥生時代中期末～後期初頭か。101は階台である。口縁部は外反し、頸部はややすばまる。102は高坏である。口縁部は不明であるが、坏部は済状に開く。脚部も済にかけて大きく開くと考えられる。ナデで仕上げられ、外面は赤色顔料が塗布される。弥生時代中期末か。103は鉢である。ポール状を呈し、底部は平底である。ナデで仕上げられる。弥生時代中期末頃か。104はミニチュア土器である。おそらく甌の胸部分であろう。外面はハケメで調整され、内面はナデで仕上げられる。105は砂岩製の不明石製品である。棒状を呈する。

以上、弥生時代後期初頭まで下ると思われる遺物が一部存在し、SD 23は埋没時期が弥生時代後期初頭と推定される。

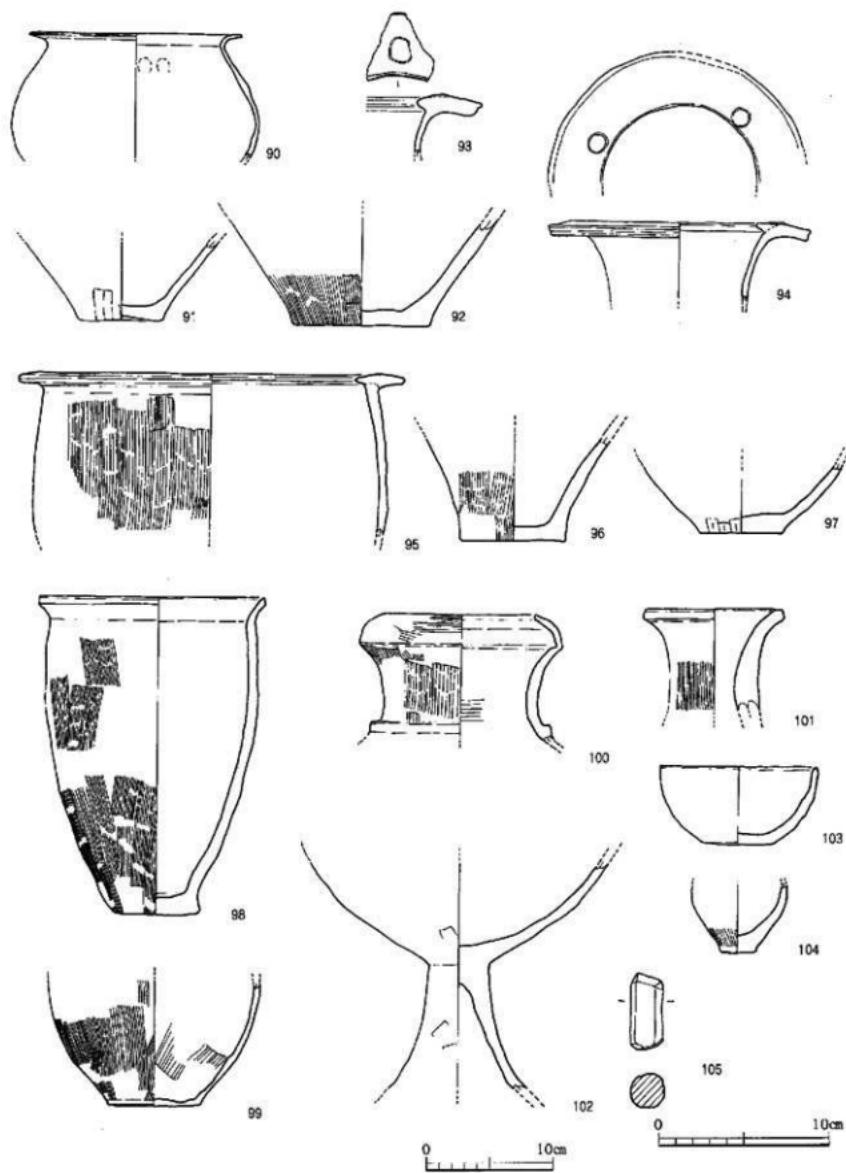
SD 21

SD 21は調査区の北側で検出された。幅が3m程で、北東～南西の方向をとる。表上剥ぎの段階で検出したため、バックホーでトレーニングを入れたところ、埋土は黒褐色粘質土で下層は暗褐色粗砂となり、深さは2m程となった。上層から下層まで土器や木片がかなりの量検出された。ところが、その夜の大風で調査区の壁が大きくなり崩壊した。SD 21は調査区の壁際に接し、深さも2mであり、そのままの状態にしておくことは非常に危険であったためやむを得ず埋め戻した。そのため、正確な位置や規模は明らかではない。ここでは試掘トレーニングから出土した遺物について説明を加える。

出土遺物(第15・16図106～134)



第13図 SD23土器溜出土遺物実測図 (1/4、1/3)



第14図 SD23出土遺物実測図 (1/4、1/3)

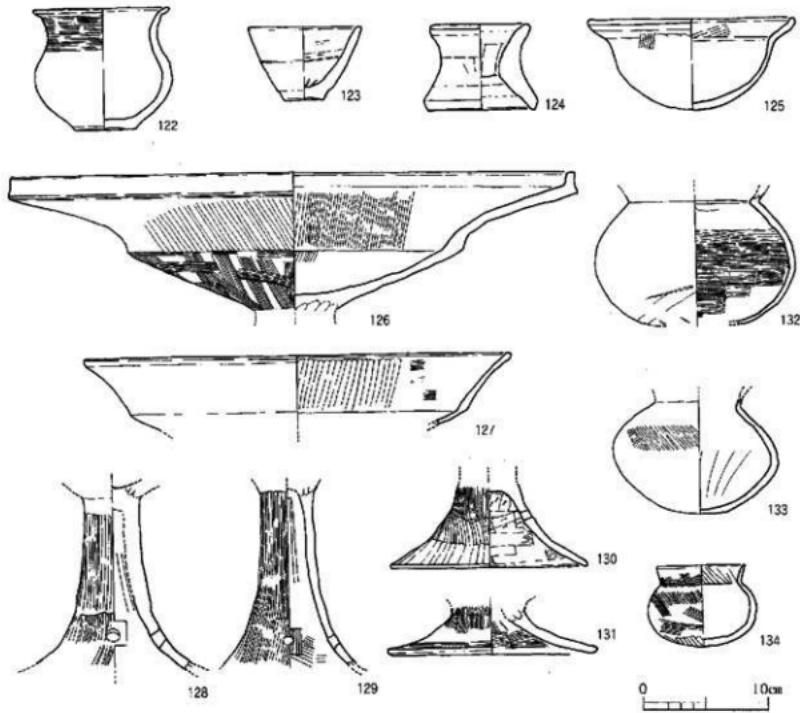
106は大型の壺である。口縁部はく字状に屈曲し、口縁部内面には突出した棱を作り出す。口縁部下には断面三角形の突帯を一条めぐらす。弥生時代終末頃か。107～111は甌の底部である。107は平底の底部で、内外面ともにハケメが施されるが、内面は部分的にナデ消される。108は平底の底部を持ち、外面はハケメのうち部分的にナデ消す。ミニチュア土器か。109はやや凹んだ平底の底部から大きく胴部へ外反して開く。外面はハケメが施される。110は平底の底部から丸く胴部へ開く。外内面ともにハケメが施される。胴部上半はナデ仕上げのようである。111はや丸底の底部である。外内面ともにハケメが施される。107、111は弥生時代後期前半か。112は壺である。口縁部は不明であるが、頸部は外反し、頸部と胴部の境目には断面三角形の突帯が一条めぐる。胴部は丸く張り、底部は丸底に近い。頸部の外内面にはタテハケが施され、内面はナデ消される。胴部の外面はナデ仕上げられ、内面はハケメが施されている。弥生時代後期後半～終末であろう。

113は高壺もしくは鉢の坏部である。口縁部から胴部へゆるやかに内湾しボール状を呈する。外内面ともにハケメが施される。弥生時代後期後半か。114は脚付きの鉢であろう。外面にはハケメが施され、ナデ消される。115は大型の壺になると思われる。口縁部から胴部へゆるやかに開き、口縁部付近に穿孔が施される。外内面ともにハケメが施され、部分的にナデ消される。116～121は器台である。大きく3つの器形に分けられる。116、119は口縁部がく字状に屈曲して開き、頸部から底部へ向かい直線的に開く。116は外内面ともにタテハケが施されるが、内面の上半はナデ消される。119は外面にタテハケが施され、部分的にナデ消される。内面は口縁部内面にはヨコハケが施され、胴部中央にはヘラ状工具による成形がなされ、底部付近はハケメで調整される。117、121は口径より底径の方が大きく、口縁部から底部にかけてゆるやかに外湾して開く。117は外面にはタテハケ、内面は底部付近のみヨコハケが施され、上半はヘラ状の工具で器面を成形した痕跡が残る。121は外面にタテハケ、内面はハケメとヘラ状工具による成形がなされる。118、120は天地に不安は残るが、口径、底径ともにほぼ同じで口縁部から底部へゆるやかに外湾する。118は外面にはタテハケ、内面はヘラ状工具による成形のあとナデ仕上げている。120は外面にタテハケが施される。弥生時代後期後半～終末であろう。

122～124は、ミニチュア土器である。122は壺である。口縁部から胴部にかけてゆるいS字を描いて屈曲し、平底の底部に至る。外面の頸部付近はヨコハケが施されたのち一部ナデ消される。123は鉢で、平底の底部から直線的に開く。内面はヘラ状工具で成形されている。124は器台で口縁部から底部へゆるやかに外湾する。いずれも弥生時代後期中葉頃であろう。125は鉢である。口縁部はゆるいく字状に屈曲して開き、胴部から底部は碗状を呈する。外内面に一部ハケメが施される。弥生時代終末頃か。126、127は高壺の坏部である。126は口径44.8cmを測る大型である。口縁部は逆く字状に強く屈曲して立ち上がり、胴部中央で屈曲する。外面にはハケメが縦横に施され、上半には縦方向にミガキが施される。内面には上半部を中心縦方向にハケメが施され、部分的にナデ消されている。127は126に比較して小型で、胴部の屈曲はやや上の位置になる。外面はナデ仕上げられ、内面は上半に縦方向のミガキが施されている。いずれも弥生時代終末と考えられるが、126は古墳時代初期頭まで下る可能性もある。128～130は高壺の脚部である。128、129は脚柱が長く、裾部にかけてゆるやかに開く。裾部に穿孔がある。外面には縦方向のハケメが施され、129は裾部内面にもハケメが見られる。130は脚柱が短く、ハの字に大きく開く。脚柱の上部に穿孔が施される。外面の上半には縦方向にハケメが施され、下半は縦方向のミガキで調整される。内面は横方向のハケメ調整があり、ナデ消される。弥生時代後期後半であろうか。131は脚付き鉢の脚部であろう。ハの字形に大きく開く。坏部と脚部の外内面に縦方向にハケメが施され、底部付近に横方向のハケメ調整がなされる。脚部の内面はハケメで調整される。132、133は短頸壺、134は小型丸底壺である。132は口縁部はく



第15図 SD21出土遺物実測図1 (1/4)



第16図 SD21出土遺物実測図2 (1/4)

字状に屈曲し、胴部は丸く開く。内面は横方向のハケメ調整がなされる。133は132よりやや小振りで口縁部はく字状に屈曲する。外面にハケメが施され、内面はハケメのちナデ調整がなされている。134の口縁部はく字状に屈曲し、胴部は丸く張る。外面にハケメ、口縁部内面はハケメ、胴部内面はナデで調整される。132、133、134は古墳時代初頭であろう。

以上、SD21出土土器を見てきたが、多くは弥生時代後期後半のもので、一部古墳時代初頭のものも検出された。故にこの河川の埋没時期は古墳時代初頭を上限に比定できよう。SD23よりも時期が新しくなるが、河川が利用されていた時期の中心は弥生時代後期後半であろう。このことから、SD23が埋没したのちにSD21が河川の流路になったと推定される。

(3) その他の出土遺物

ここではピットや包含層出土の遺物を説明する。

S P 15出土遺物(第17図135・136)

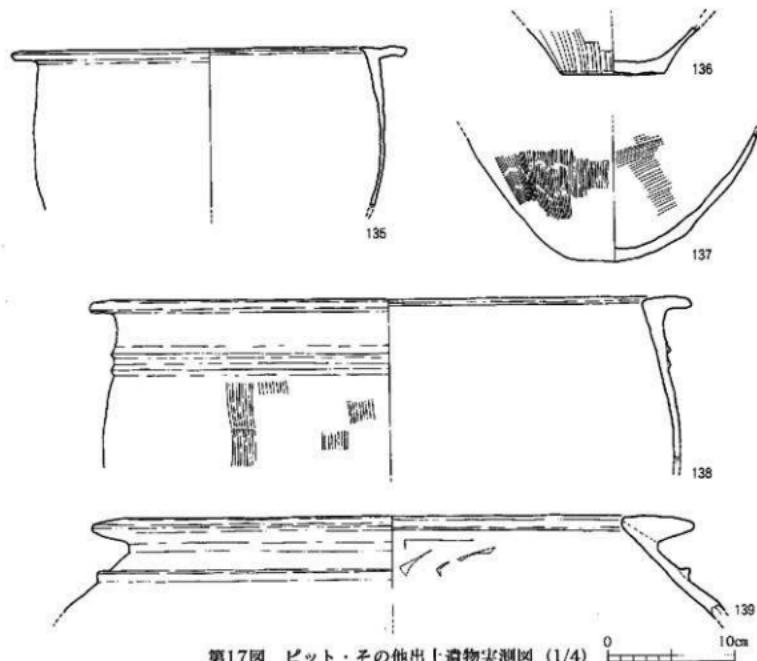
135は甕である。鋸先状口縁を呈し、口縁部上面は平坦である。弥生時代中期中葉であろう。136は甕の底部である。平底を呈し、外面にはタテハケが施されている。

S K 27出土遺物(第17図137・138)

137は甕の底部である。丸底で、外内面ともにハケメが施される。弥生時代終末。138は甕の口縁部である。口縁部は逆し字状を口縁部下に断面三角形の突帯が2条めぐる。外面にはハケメ調整がなされる。弥生時代中期後葉であろう。

包含層出土遺物(第17図139)

139は地山上部に堆積していた包含層から出土した。甕の口縁部である。口縁部はく字状に強く屈曲し、胴部は強く外反して開く。口縁部下に断面三角形の突帯が1条めぐる。弥生時代中期後半であろう。



第17図 ピット・その他出土上遺物実測図 (1/4)

3. 小結

以上久保園遺跡第2次調査について、第1面、第2面にわけて述べてきた。以下に現時点で判明したことを述べ、まとめに代えたい。

久保園遺跡第2次調査地点は第1次調査地点の北西に位置する。第1次調査地点は標高約20mの小丘陵上に立地しており、弥生時代～古墳時代の住居址、弥生時代中期の大型掘立柱建物址等が検出されている。第2次調査地点はこの小丘陵を北西側に下った標高5.1～5.8mの沖積地上に立地する。調査区南端の遺構面が最も高く、北へ向かい低く傾斜する。南端では地山である花崗岩バイラン土の黄褐色土が表上下50cm程で検出されたが、北側は地山が傾斜して上部に茶褐色土の包含層が堆積している。天王山を北西へ下りきった處に位置していると考えてよい。

遺構面は2面あった。第1面は地山の一部と包含層上面、第2面は包含層を除去した地山面である。第1面では、溝2条、井戸1基、ピットが検出されている。溝はいずれも出土遺物が少なく、詳細は不明であるが、遺物の小片から検討してSD01は弥生時代、SD02は弥生時代中期以降と推定される。いずれも北東-南西の方向を取り、天王山の西側からの流れと推定される。1基検出された井戸は、古墳時代前期の土器が大量に投棄しており、井戸祭祀が行われていたと考えられる。土器は甕が中心で、ミニチュア土器はわずかであった。この井戸SE03以外の遺構は、鉢が出土したSD07、大型甕が出土した溝状遺構SD06があり、いずれも弥生時代終末の時期である。遺構は少ない。

第2面は、溝2条、河川、ピット等が検出されている。SD19とSD20は近接して位置しており、出土遺物から見てもほぼ同時期で弥生時代中期後半頃である。SD23際の土器溜は弥生時代中期末の祭祀遺構である。SD23の埋土から出土した土器の中には一部弥生時代後期初頭まで下るものも含まれている。このことからSD23の上限は弥生時代後期初頭であるといえよう。そのSD23を切るSD21は埋土の状況から自然流路と考えられるが、出土土器は一部古墳時代初頭を含む弥生時代後期後半～終末の時期に当たる。故にSD21は古墳時代初頭を上限とする。その他の遺構として弥生時代中期後半、弥生時代終末のピットが検出されている。

以上から、第1面は主として弥生時代終末～古墳時代前期、第2面は、弥生時代中期後半～古墳時代初頭の時期であるといえよう。第2面から第1面にかけて、すなわち弥生時代中期後半～古墳時代前期に至るまで人々の活動が継続していたといえる。第2面では、第1面に比較してややピットは多いものの、掘立柱建物は検出できなかった。主要な遺構は河川と溝のみで、この地点を中心とした集落が広がっていたとは考えにくい。第1面は第2面に比較してピットが少なくなる代わりに井戸が検出されている。ただ、その他同時期の確実な遺構はピットのみでこの面も集落の広がりを押さえられるものではない。つまり、生活の痕跡、言い換えれば集落の一端はみられるものの、集落の中心はこの地点を離れた別の地点に存在していると推定される。

さて、第1面と第2面で共通している点はいずれも溝が検出され、ほぼ同方向をとっていることである。河川以外の溝は水が流れた形跡がないため、なんらかの区画を示したものとも考えられる。さらに、第2面から第1面への時間的経過において位置を変えながらも同じ方向で掘削されており、別の場所にある中心的集落の規則性が継続して働いていたと考えられる。

この中心的集落がどこに存在しているかであるが、近辺の調査から推測しても、やはり同じ久保園遺跡第1次調査地点を中心とした範囲をそれに当てることができるのでないか。第1次調査地点では、先にも述べたように弥生時代中期中葉～古墳時代に至る住居址、掘立柱建物、弥生時代中期後半～後期前半に至る土器溜などが検出されている。時期的にも本調査地点と合致する。特に土器溜は概期の祭祀遺構として共通しており、両地点の類似点としてあげられる。ただ、第1次調査地点は天王山の南側斜面に位置し、本調査地点の溝の方向を考えると、少し矛盾も生じる。その場合、天王山西側山麓に集落の広がりを想定することもできる。ともあれ、久保園遺跡周辺には同時期の集落を持つ大谷遺跡、赤穂ノ浦遺跡などがある。今後はこれらの遺跡との関連をも検討する必要があろう。

表1 遺構一覧表

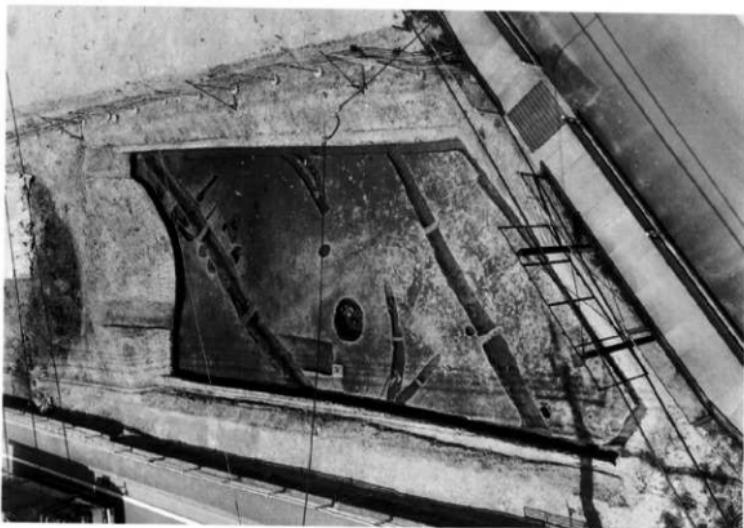
辨別	遺構	延長(m)	幅(m)	深さ(m)	出土遺物番号	時期
第4回	SD01	9.2	0.45-0.75	1.8-2.8		
第4回	SD02	11.45	0.7-0.85	0.06-0.44	1-2	
第10回	SD19	11.8	0.85-1.75	0.16-0.46	51-63	弥生中期後半～後期初頭
第10回	SD20	10.8	0.75-1.25	0.06-0.08	64-75	弥生後期初頭
辨別	遺構	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	出土遺物番号	時期
第5回	SE03	1.25	1.2	1.1	3-39	古墳前期

表2 出土植物一覽表

図版1



2. 第2面全景(南から)



1. 第1面全景(南から)

図版2



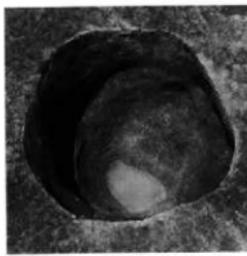
1.SD01(南西から)



2.SD02(南西から)



3.SE03上層土器出土状況(東から)



4.SE03完掘状況(東から)



5.SD19・SD20(南西から)

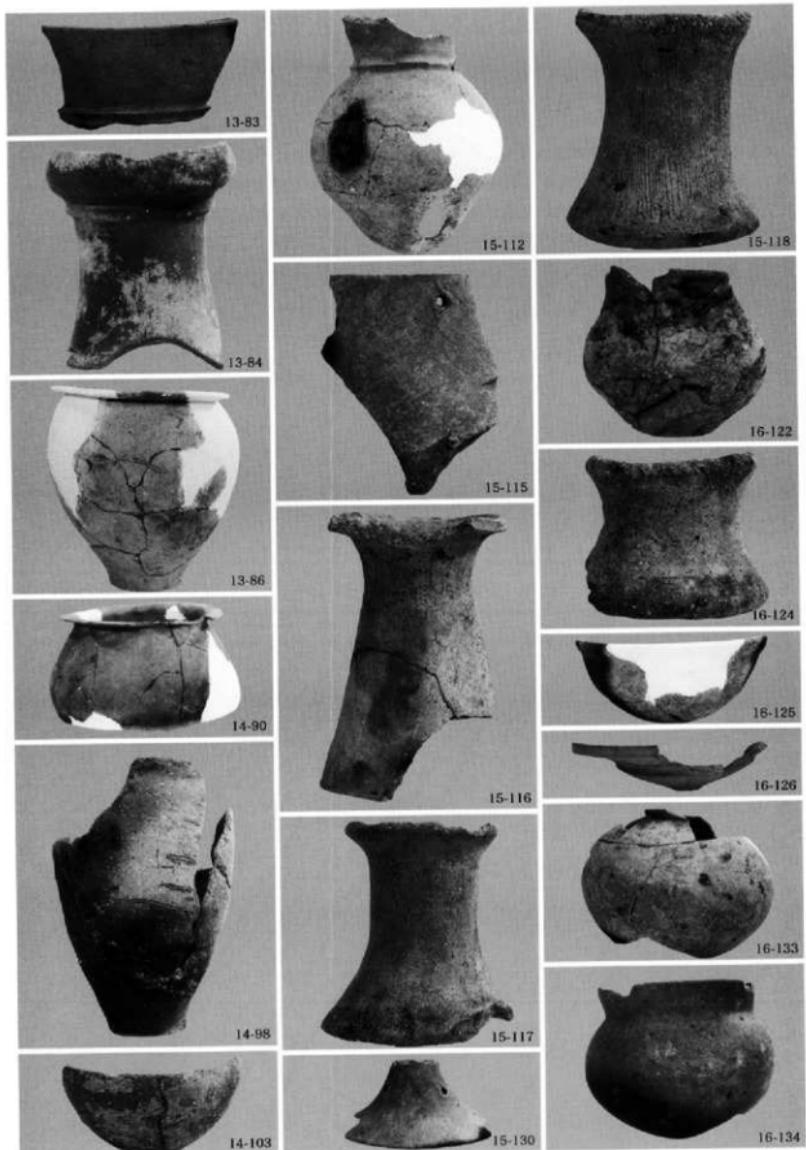


6.SD23土器溜(東から)

图版3



出土遺物1



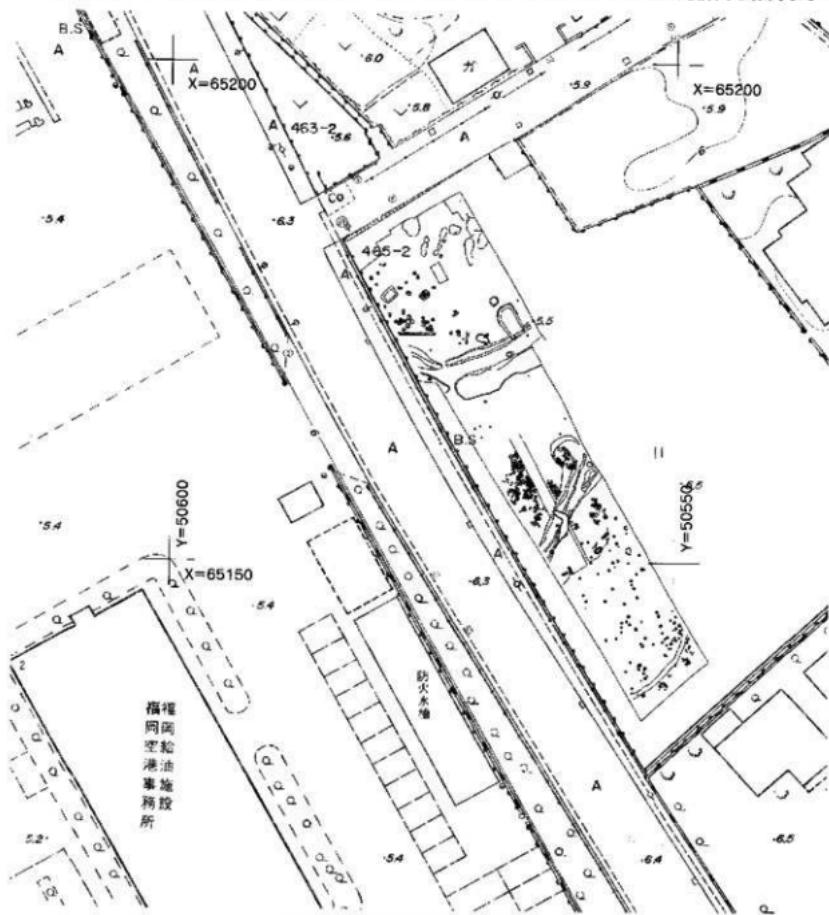
出土遺物2

席田青木遺跡第4次調査

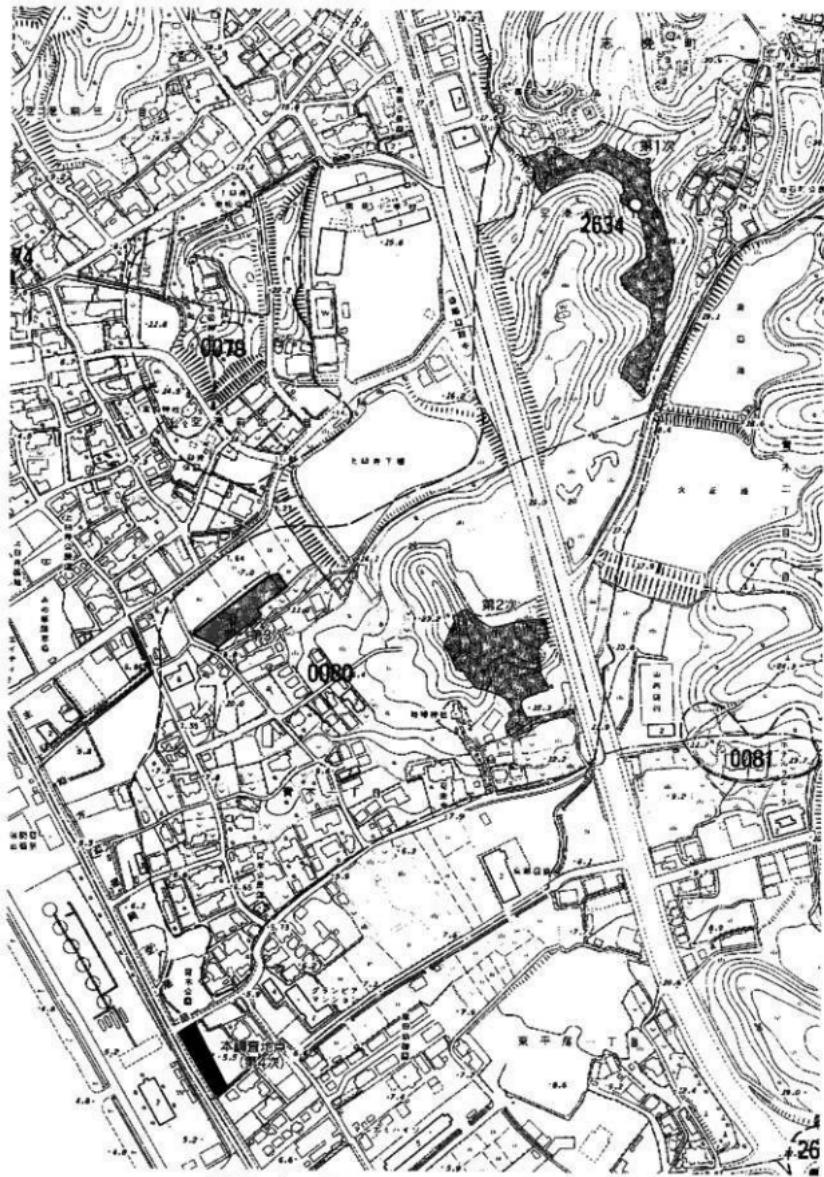
I. 調査の概要

1. 調査地点の位置

本調査区は、席田青木遺跡群の南西に位置する。席田青木遺跡は月隈丘陵の北端に派生する小丘陵上に立地する。本調査区は席田青木遺跡群の範囲外ではあるが、試掘調査の結果、現耕作土下20~80cmで遺構面である黄褐色粘質土が検出された。そのため、席田青木遺跡群の範囲を拡大し、調査することとなった。本調査区は福岡空港敷地の東側際、沖積地上に位置する。調査区の遺構面は標高4.4~



第1図 調査区位置図 (1/500)



第2図 席田吉木遺跡群調査地点位置図 (1/4,000)

5.1mを測り、調査区の北西から南東方向へ向かって低く傾斜する。

2. これまでの調査

席田青木遺跡群では今回が4回目の調査となる。第1次～第3次までの調査内容を概観してみる。

第1次調査

席田青木遺跡群の北側、丘陵の北側斜面に位置する。弥生時代中期前半から後期初頭にかけての土壙墓や甕棺墓、古墳時代終末期の横穴式石室、古墳時代の石蓋土壙墓、中世城を形成すると思われる溝、近世墓が検出されている。特に弥生時代の土壙墓、甕棺墓は160基、近世墓は560基余り検出されている。

第2次調査

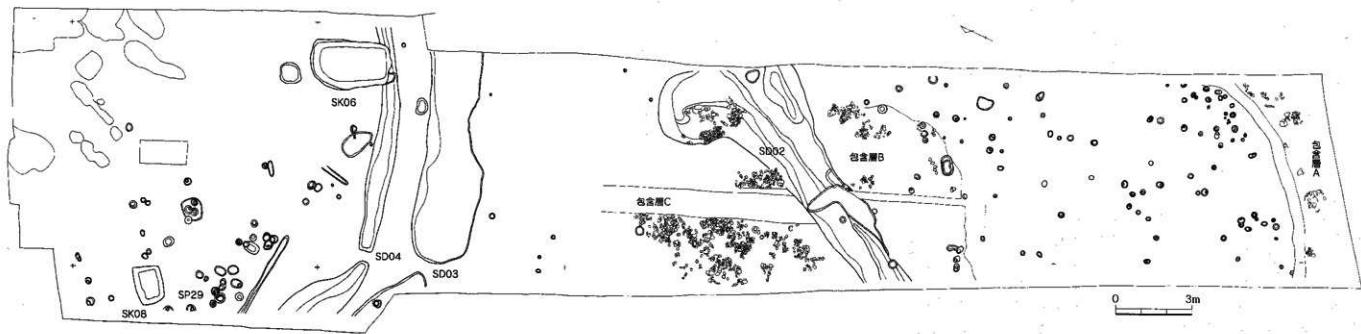
第1次調査地点の200m南に位置し、丘陵から南に延びる尾根の頂部からその東斜面を経て谷部にわたる部分である。第1次調査地点で検出された甕棺墓と一連のものと推定される甕棺墓、弥生時代後期後半頃の溝や上塙、12世紀前半の井戸、12世紀半ば、13世紀後半の上塙墓が検出されている。

第3次調査

第2次調査地点から西側へ下る緩斜面上に位置する。弥生時代終末～古墳時代前期の掘立柱建物、井戸、溝、土塙、6世紀後半～7世紀初頭の掘立柱建物、環濠、古代～中世前期の掘立柱建物、上塙などが検出されている。

3. 調査経過

席田青木遺跡第4次調査は、久保園遺跡調査終了後、2000年7月6日からバックホーによる表土剥ぎを開始した。上木戸道路建設部東部建設第2課側が耕作土面までの盛り土の除去を行い、その後、耕作土から遺構面である黄褐色粘質土面までの鋤き取りを行った。廃土置場の関係で一度に全面を剥ぎ取ることができず、反転して調査を行うことにした。まず調査区南東側2/3程の範囲を、その後残りの北西側を調査した。調査区南東側の遺構面は黄褐色粘質土上面に包含層はなく、また一部トレンドを入れてみたところ、この黄褐色粘質土の50cmほど下層では粗砂、青灰色粘質土となり、水がわき出した。このため黄褐色粘質土上面で止め、遺構検出、掘削を行った。遺構面は北東側で急激に高くなり、安定した地山となった。調査期間中度々大雨が降り、調査区はそのため何度も冠水し、排水作業等で手間がかかったが、遺構掘削、図面作成、写真撮影等をすませ、8月17日にはすべての作業を終了、撤収した。



第3図 調査区構造配置図 (1/150)

II. 調査の記録

1. 遺構と遺物

表土、耕作土を除去した黄褐色粘質土上面が遺構面となり、標高4.4~5.1mを測る。遺構面の調査区南東側は黄褐色粘質土が不安定で、部分的に粗砂がかぶっていた。本来は河川の中であった可能性がある。遺構面は調査区北西側よりで急激に上がり、黄褐色粘質土は安定したものとなる。調査区の中央と南東端には包含層、河川が検出され、北東側の標高が高い範囲には溝、ピット、土壙などの遺構が南東側に比較してやや多く分布している。以下、遺構ごとに説明を加える。

(1)溝

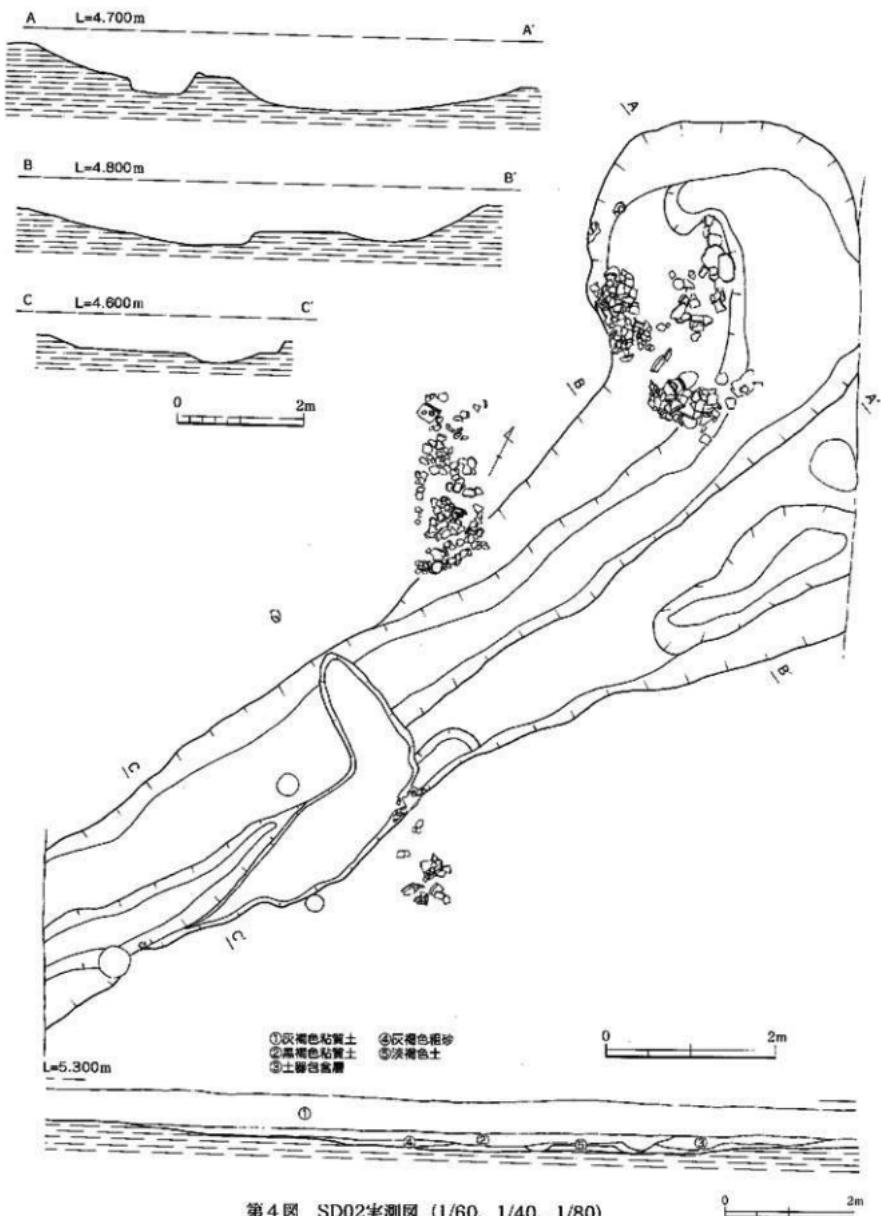
S D02(第4図)

調査区ほぼ中央で検出された。北東~南西の方向で流れる。幅1.24~5.95m、深さ0.16~0.24m、延長9.14mを測る。溝の北端は大きくえぐれ、土器溜のように上器が集中していた。

出土遺物(第8~10図1~44)

1、2は大型壺である。1は口縁部がく字状に屈曲し、胴部は丸く張る。口縁部と頸部の境目に断面三角形の突帯が1条、胴部や下方に1条めぐる。外面にハケメ調整がなされる。2は口縁部がく字状に屈曲し、胴部はゆるやかに内湾する。外面内面ともにハケメが施される。いずれも弥生時代終末であろう。3、5は大型壺である。3は口縁部がく字状に屈曲し、胴部が大きく張る。外面にハケメが施される。5は口縁部が外湾し、胴部は大きく張る。口縁部と頸部の境目に断面三角形の突帯が1条めぐる。外面にハケメ痕が残る。弥生時代終末であろう。4は壺である。ほぼ完形で、口縁部は頸部から少し外反しながら立ち上がり、胴部は丸く張る。底部は平底である。頸部と胴部の境目には断面三角形の2条の突帯がめぐる。外面にはタテハケ、内面には上部にハケメ痕が残る。弥生時代終末か。6、7は甌である。6は口縁部から胴部にかけてゆるやかにS字を描いて屈曲し、外面にはタテハケ、口縁部内面には横方向にハケメが施される。7は口縁部がく字状に屈曲し、胴部はやや張る。外面にはハケメ、口縁部内面には横方向にハケメが施される。胴部内面にはヘラケズリのような痕跡が残る。いずれも弥生時代終末であろう。8、9は甌の胴部である。いずれも平底で胴部はゆるやかに外湾する。8は胴部外面にタテハケが施される。10~12は甌の底部である。いずれも平底で胴部は大きく開く。胴部外面にハケメが施される。13、14は高杯の脚部である。いずれも脚柱部の上部は直線的で裾部に向けてゆるく開く器形であろう。15は脚付き鉢の脚部であろう。16、17は器台である。いずれもゆるく外湾し、口径と底径は同じぐらいの大きさになりそうである。17は粘土積み上げによる成形のあとが見られる。18は鉢である。碗状に開き、底部はレンズ底である。弥生時代後期後半か。19は壺であろう。胴部はそろばん玉状に張る。胴部外面は横方向のミガキで調整され、内面上部は指押さえによる成形が見られる。23~26は甌もしくは鉢の底部である。23、24は平底、25はやや凹んだ平底、26は丸底を呈する。20~22はミニチュア十器である。20、21は鉢である。20は平底で胴部が直線的に開き、21は丸底に近く胴部はゆるやかに外湾する。22は甌である。口縁部は不明であるが、胴部は逆く字状に屈曲し、内面は指押さえによる成形がなされる。いずれも弥生時代後期後半であろう。28は須恵器の甌の脚部である。胴部外面には平行のタタキが施され、上半部には細い沈線が5条めぐる。おそらく螺旋状になっていると思われる。内面はタタキのあとナデ消している。部分的にタタキ痕が残る。半島系上器を模倣した国産の土器と推定される。5世紀後半~6世紀前半にかけての時期であろう(吉留秀敏氏のご教示による)。

以上はSD02上層から出土した。以下はSD02北端の下層砂層中の出土遺物である。



第4図 SD02実測図 (1/60、1/40、1/80)

29は複合口縁壺である。口縁部は逆く字状に、頸部から胴部はく字状に強く屈曲する。口縁部外面には円形浮文が施される。おそらく4カ所ついていたのであろう。頸部と胴部の境目には断面三角形の突帯が1条めぐる。弥生時代後期後半であろう。30は甕の胴部である。胴部は丸く張り、底部はやや丸い。外面にはタテハケ、内面にはナデによる調整が施される。弥生時代終末であろう。31は複合口縁壺である。口縁部は逆く字状に、頸部から胴部はく字状に強く屈曲する。外面にタテハケ、内面には横方向のハケメ、タテハケが施されている。頸部と胴部の境目には断面三角形の突帯が1条めぐる。弥生時代後期後半。32~34は甕の底部であろう。いずれも平底で33には底部に穿孔がある。35は高环の坏部である。脚柱部との接合面ではなく離していた。碗状を呈し、外面にタテハケが施される。弥生時代後期後半か。36は高环の脚部である。坏部とは接合面ではなく離する。外面にハケメが施され、裾部にかけてゆるやかに聞く。37~40は器台である。37はやや大型で、口縁部が強く外反し、裾部も聞く。外面にはタテハケが施される。弥生時代終末か。38はゆるやかに外湾する。外面はタテハケで調整されている。39、40は小型の器台である。39は口縁部が強く外反し、全体を指揮さえ成形する。40は口縁部上端が平坦に仕上げられ、ゆるやかに外湾する。41は不明土製品である。天地が不明のため開放している方を上に示しているが、上下がすばまり中央部が丸くふくらむ。中央に穿孔が1カ所ある。外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整される。42は小型の壺である。口縁部は直線的に立ち上がり、胴部は丸底を呈する。弥生時代後期後半であろう。43、44は石包丁である。43は平面形が半円に近く、孔間の長さは2.8cmである。44は43に比べて幅が狭く細長い。孔間の長さは3.0cmを測る。

以上SD02出土の遺物を見てみた。時期不明のものもあるが、そのほとんどは弥生時代後期後半~終末にかけての時期である。28の須恵器壺のみが時期が下るが、これは混入と考えてよいだろう。よってSD02は弥生時代終末に埋没したと推定される。

S D03(第5図)

調査区やや北よりに位置する。東北東~北西の方向に、陸橋を境に屈曲して走る。幅1.8~2.55m、深さ0.05~0.36m、延長11.7mを測る。地形の変換部分に位置しており、そのために陸橋より東側部分は上部が削平され、底面のみの残存であった。遺物はほとんど出土していない。

出土遺物(第10図45)

45は弥生時代甕の底部である。平底を呈する。

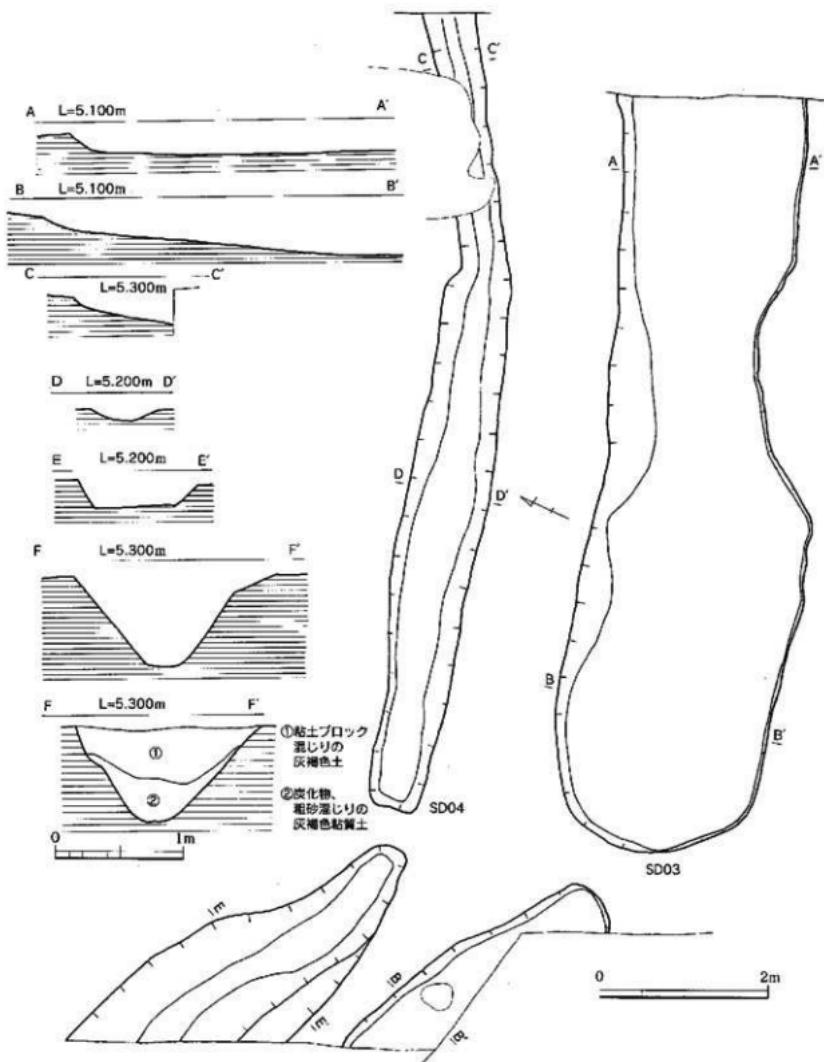
S D04(第5図)

SD03の北側にはほぼ並行に位置する。陸橋で屈曲し、陸橋の位置もSD03と一致する。幅0.5~1.55m、深さ0.04~0.71m、延長12.8mを測る。SD03との位置関係から同時期か、さほどの時期差はないと思われる。出土遺物は少ない。

出土遺物(第10図46~48)

46~48は土師皿である。いずれも口径は12~13cmで、46は底部はヘラケズリ、47、48は糸切り痕が残る。15世紀頃と思われるが、共伴遺物は少なく断定はできない。

SD04は中世後半頃を上限とする時期といえるであろうが、その詳細な時期については出土遺物が少なく明らかにはできない。また、先に述べたように位置関係からSD03はSD04とはほぼ同時期と考えることができる。



第5図 SD03・SD04実測図 (1/60、1/40)

(2)井戸

S EO1(第6図)

S D02の南に位置する。長径0.74m、短径0.70mではば正円であり、直に掘り込まれる。深さ0.96mである。遺物はあまり出土しておらず、上端付近で弥生土器が出上している。

出土遺物(第10図49~51)

49~51は壺の底部である。いずれも丸底に近い。49は大型の壺であろう。弥生時代終末である。

出土遺物はいずれも弥生時代終末であるが、井戸の上端近くの出土であり、井戸の時期の上限を示していると指摘するにとどめる。

(3)土壙

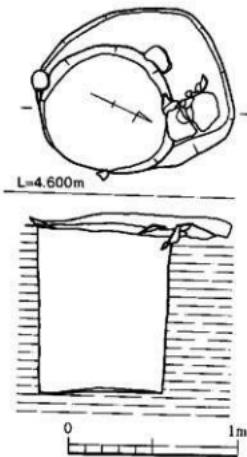
S KO6(第7図)

S D04の東端付近を切っている。長軸3.36m、短軸1.86m、深さ0.34mを測る。断面は逆台形を呈する。出土遺物は少ない。

出土遺物(第10図52~54)

52、53は土師皿である。52は器高がやや深めで口径が14.1cmである。53は52に比べて器高が浅くなり、口径は13.1cmを測る。いずれも底部は糸切り痕が残る。54は磁石である。全長10.6cm、最大幅6.7cm、厚さ2.6cmを測り、2面使用痕がある。

このほか図示できなかったが火鉢の破片も出土しており、断定できないが、15世紀頃と考えられる。



第6図 SE01実測図 (1/30)

S K08(第7図)

調査区の北、西壁付近に位置する。長軸0.80m、短軸0.57m、深さ0.19mを測る。断面は逆台形を測る。底面付近に人頭大の石が置かれていた。出土遺物は少ない。

出土遺物(第10図55)

55は土師器の小皿である。口径7.5cmを測る。底部は糸切り離しである。中世後半か。

出土遺物が少ないため時期の断定はできない。土師器小皿の出土から中世後半としておく。

(4) ピット・その他

S P29(第7図)

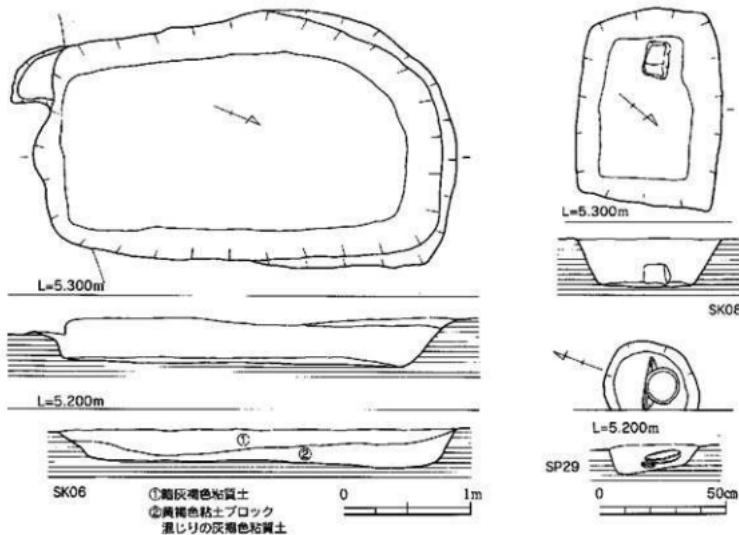
S K08付近に位置する。底面付近に棒状の板と土師器の坏が掘え置かれていた。

出土遺物(第10図56)

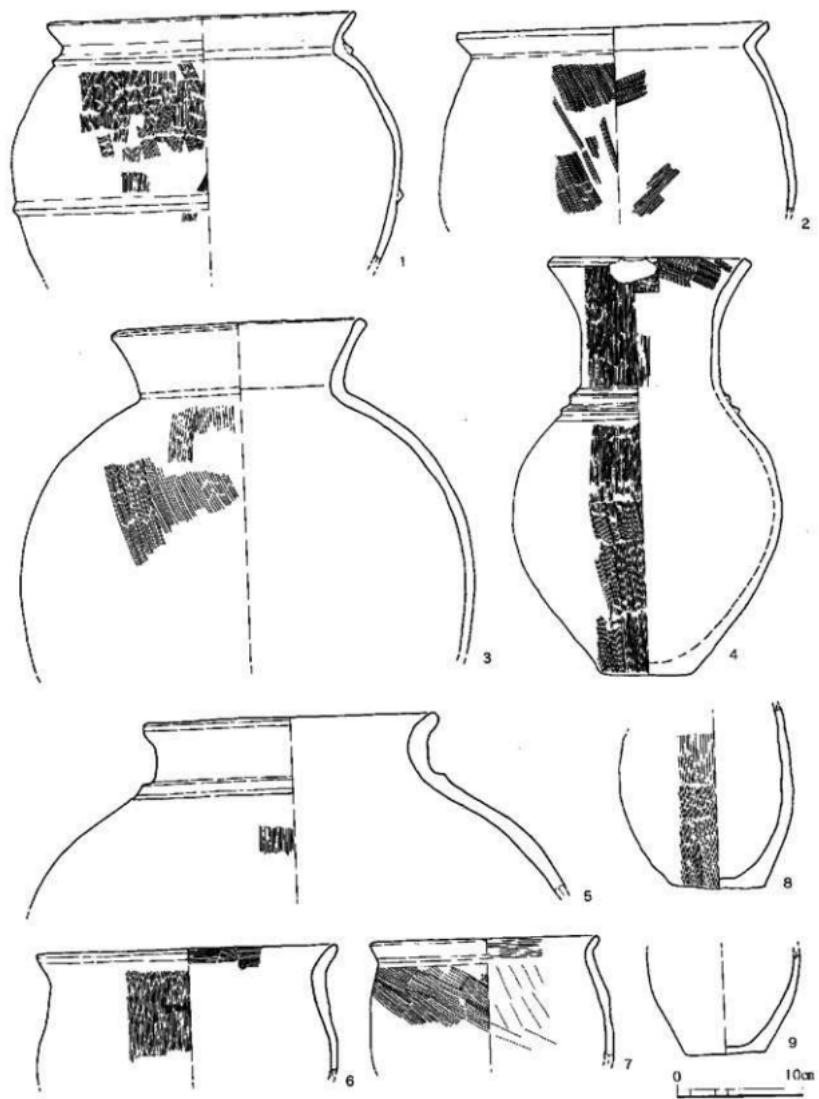
56は土師器の坏である。碗状を呈し、口縁部はやや外反する。丁寧なナデで仕上げられる。

その他出土遺物(第10図57)

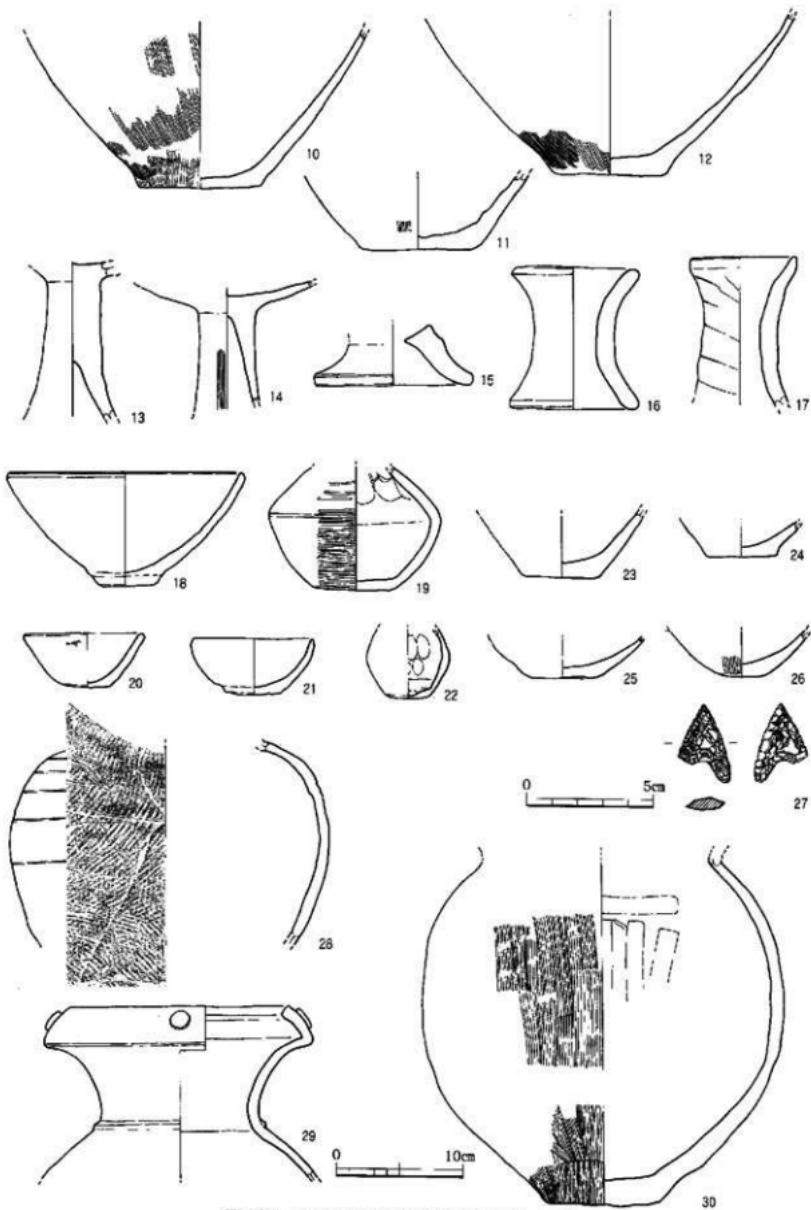
57は擾乱から出土した。器台である。筒状ではなく受部が环状になる。裾部はゆるやかに開く。受部の縁を削り出し、平面形を花弁状に仕上げる。



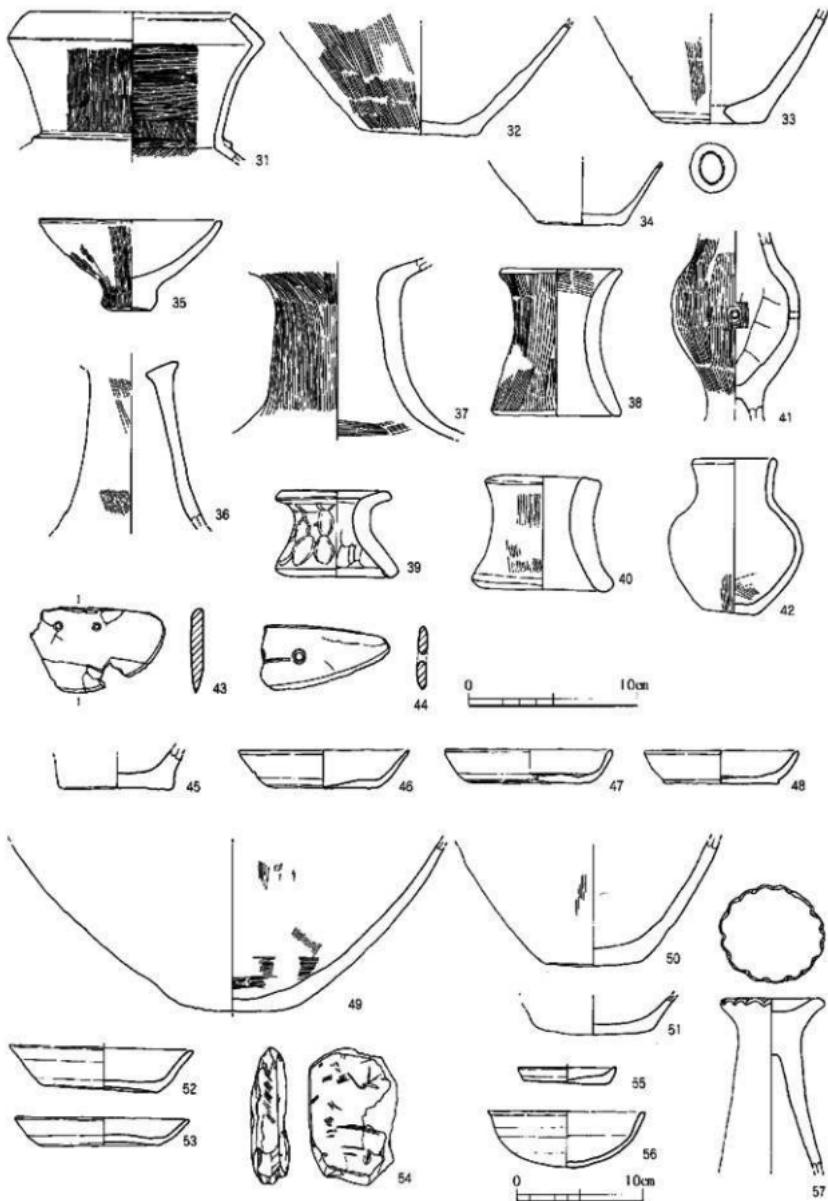
第7図 SK06・SK08・SP29実測図 (1/40, 1/20)



第8図 SD02出土遺物実測図1 (1/4)



第9図 SD02出土遺物実測図2 (1/4, 1/2)



第10図 SD02・SK06・SK08・SP29出土遺物実測図 (1/4、1/3)

(5) 包含層

調査区南半分は沖積地であり、遺構面の低い部分には包含層が堆積していた。調査区南端、SD02の周辺である。包含層には遺物が大量に含まれていた。

包含層A出土遺物(第11図58~65)

調査区南側の、最も標高の低い遺構面上に堆積していた、黒褐色粘質土層である。

58、59は壺の底部である。平底であるがやや丸みを帯びる。60、61はミニチュア土器の鉢である。60は植木鉢形に直線的に胴部が開く。61は口縁部がやや内湾する。弥生時代後期後半か。62は蓋のつまみである。63~65は器台である。いずれも口径と底径がほぼ同じ長さである。弥生時代後期後半であろう。

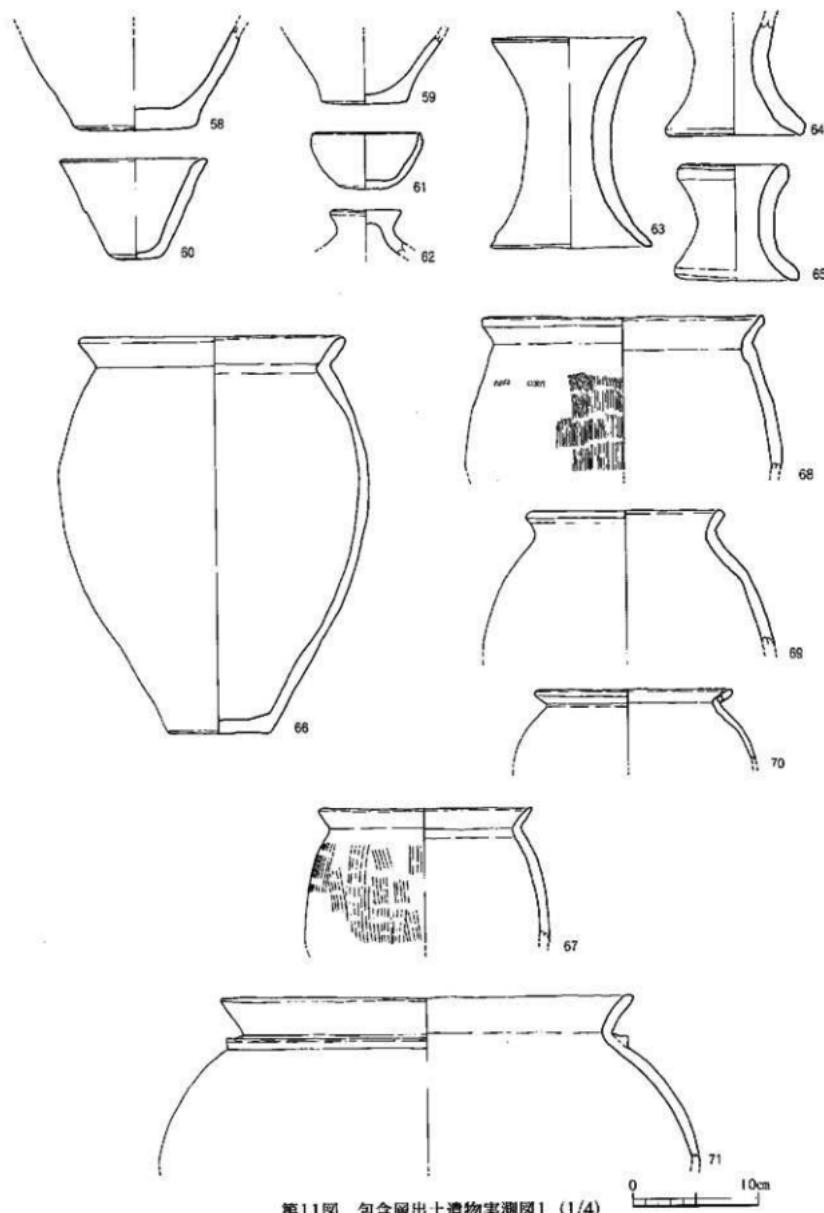
包含層B出土遺物(第11~14図66~149)

包含層BはSD01の南側に広がっていた上器層である。おびただしい量の遺物が検出された。以下に個々の遺物の説明を加える。

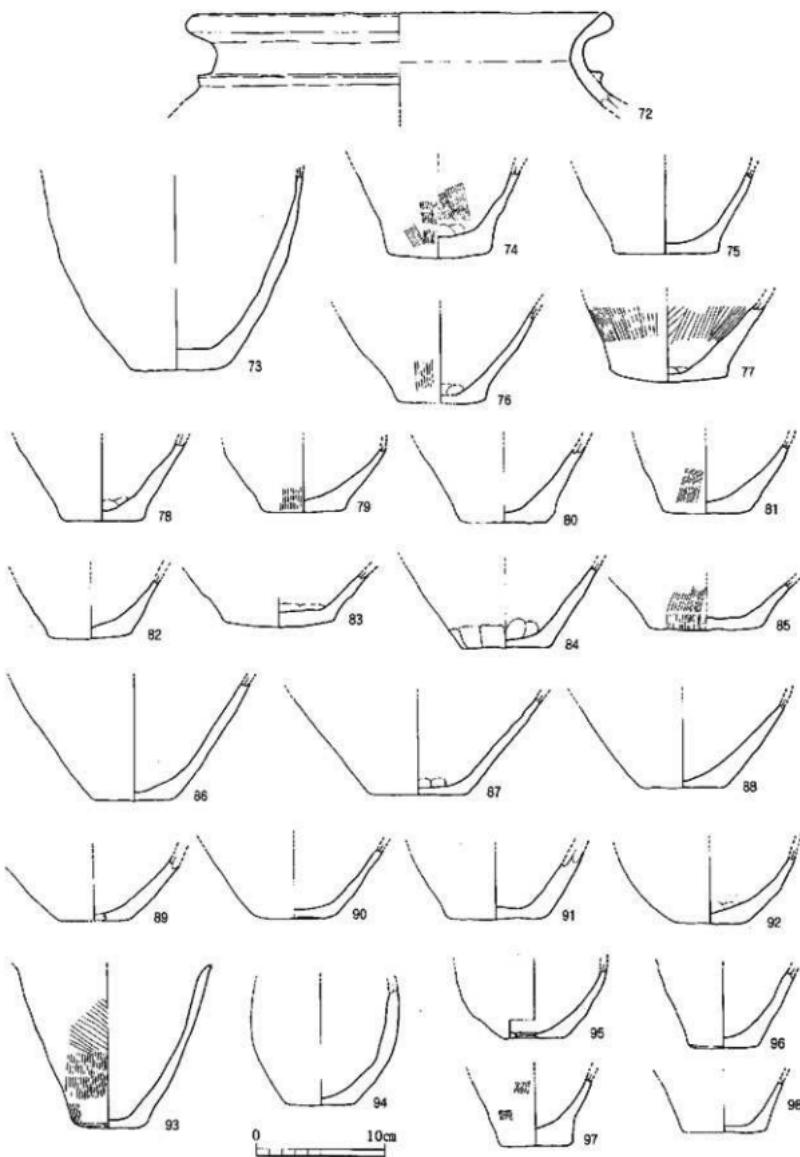
66~98は壺である。66~68は口縁部がく字状に屈曲し胴部がなだらかに内湾する器形である。67、68は胴部外面にタテハケが施される。69、70は胴部が張り出し、口縁部はややすぼまる。69は壺の範疇に入るかもしれない。70はII縁部が強く屈曲し、穿孔が施されている。いずれも弥生時代後期後半もしくは終末まで下る。71、72は大型の壺である。71は口縁部がく字状に強く屈曲し、胴部が大きく張る。口縁部下に断面三角形の突帯が1条めぐる。72は口縁部端を肥厚させ、口縁部よりやや下に断面三角形の突帯を1条めぐらせる。口縁部は丸みをつけて外湾させる。いずれも弥生時代終末と思われる。

73~98は壺の底部である。73は胴部がゆるやかに内湾しながら立ち上がる。丸みを帯びた平底である。74、76、77、83は底部がやや丸みを帯びた平底である。ハケメ痕、指頭圧痕が残る。75、78~82、84、85、91は平底を呈する。76、78、84は底部内面に指揮さえのあとが残る。86~90は底径に対して、胴部の張りが大きい。86、87、89は大型の壺か壺である可能性がある。92は胴部が丸く内湾する。底部と胴部の境目は明瞭でない。93~98、109は小型土器の範疇に入るであろう。93は底部から胴部はほぼまっすぐに開き、II縁部付近でやや外反する。胴部外面にハケメが見られる。94、95、109は胴部が丸く張る。95は底部に穿孔が見られる。96~98は平底で胴部がほぼ直線的に開く。

99~110は壺である。99~106は複合口縁壺である。いずれも口縁部が逆く字状に強く屈曲するが、後縁はやや丸みを帯びる。99はやや内湾した頸部から胴部へやや強く張り出す。100は頸部から胴部へなだらかに張り出す。薄い突帯が頸部と胴部の境目に1条めぐる。101、102は頸部がすぼまり、胴部が大きく張り出す器形になると思われる。103~105は頸部はやや開き気味である。106は他のものと異なり、頸部が細く閉まり、胴部が丸く張る細身の器形である。頸部と胴部の境目に幅広の突帯が1条めぐる。弥生時代後期中葉~後葉であろう。107、108は広口壺の口縁部である。107は口縁部から胴部にかけてゆるやかなS字状を描いて屈曲する。108は口縁部がやや開き、胴部にかけてゆるやかに開く。頸部と胴部の境目付近に断面三角形の突帯を1条めぐらす。いずれも弥生時代後期後半か。110は壺の胴部である。胴部は丸く張り口縁部はすぼまる。111~113は鉢である。111は広口壺の範疇にはいるかもしれないが、口縁部が若干開き気味のため鉢に分類した。口縁部から胴部にかけてく字状に屈曲し、境目には断面三角形の突帯が1条めぐる。胴部は丸く張る。112は逆台形状に開く。底部は平底で胴部外面にタテハケが施される。113は平底の底部からゆるやかに外湾しながら胴部が開く。111は弥生時代後期後半、112、113は弥生時代後期中葉~後葉にかけての時期か。



第11図 包含層出土遺物実測図1 (1/4)



第12図 包含層出土遺物実測図2 (1/4)

114、115は高壺である。114は壺部がおそらく碗状を呈すると思われる。脚部はゆるやかに外湾して開く。115は壺部が碗状を呈し、脚部がやや大きく開く。壺部と脚部の接合部が厚い。

116～130は器台である。116～119は受部と脚部の境が屈曲するタイプである。116は受部と裾部が大きく開き、脚部が細くしまる。117、119は受部と脚部の境目に稜が入る。119は脚部と裾部の境も屈曲する。120～123は受部から裾部にかけてゆるやかに外湾する。受部径と脚部径がほぼ同じ長さとなる。124、125は細身のタイプである。いずれも裾部がやや広がる。126～130は器高が低く、小型となる。126は厚手の作りである。127、129は受部上面を平坦に仕上げる。128は受部と裾部の径がほぼ同じで円筒形に近い。130は受部が碗状になり、全体の形がX字状を呈する。116～119、127、129は弥生時代終末に近い時期、その他のものも弥生時代後期後半の範疇であろう。

131～148はミニチュア土器である。134～137は甕の底部であろう。いずれもレンズ底を呈する。131、132は133のタイプの、鉢の胸部の可能性がある。132は底部から直線的に胸部が立ち上がる。133～146は鉢である。133、140は縦長のタイプ、138～143はやや横長のタイプ、144～148はさらに小型の碗タイプである。いずれも手づくね成形である。

149は滑石製石錠である。細長い橢円形を呈し、十文字に溝が掘り込まれる。紙通しのための溝であろう。

以上：若干古い時期の混入も見られるが、ほぼ弥生時代後期後半ないし終末にかけての時期の遺物である。

包含層C出土遺物(第15図150～153)

包含層CはSD02の北側に広がっていた。包含層Bと一連のものとも考えられる。図示可能な遺物を掲載した。

150は大型甕である。口縁部はく字状に屈曲し、胴部はゆるやかに外湾する。口縁部と胴部の境目には断面台形の突帯が1条めぐる。外面にハケメが見られる。弥生時代終末であろう。151、152は甕の底部である。底部はやや丸みを帯びる。153は壺の口縁部である。頸部から口縁部にかけて大きく外反する。

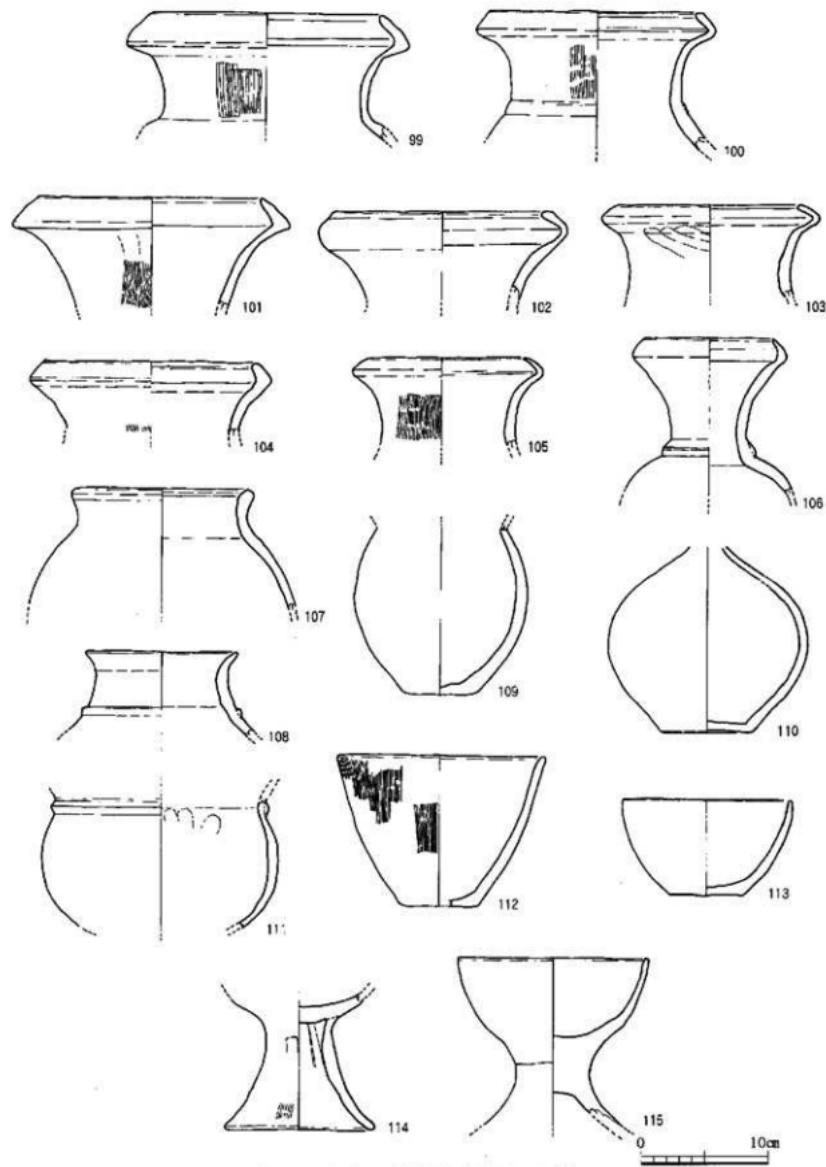
2. 小結

以上、主な遺構と遺物について概観してみたが、今回の調査で明らかになったことをまとめてみたい。

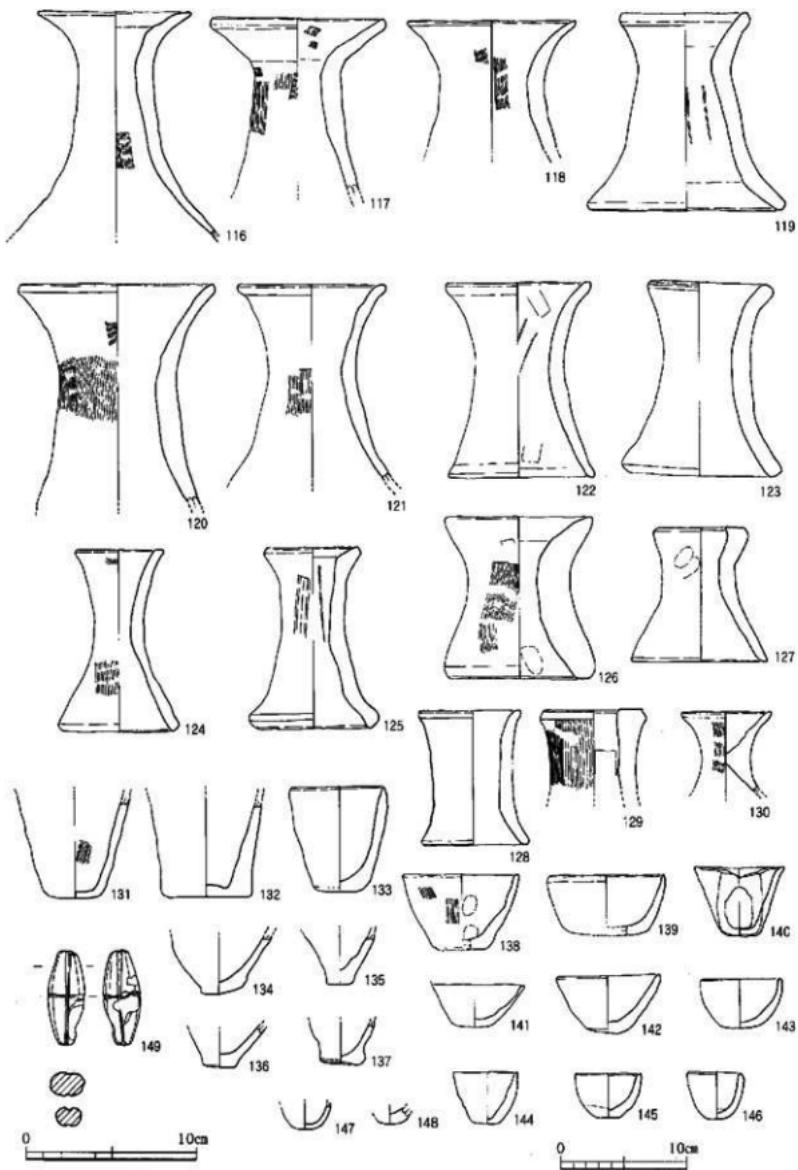
本調査区は席田青木遺跡群の南に位置している。第1次調査地点から第3次調査地点が丘陵上もしくは丘陵斜面に立地しているのに対して、本調査区は丘陵麓の沖積地上の立地となる。

検出遺構は、弥生時代後期後半～終末の溝、井戸、中世後半の溝、土壙、ピットである。

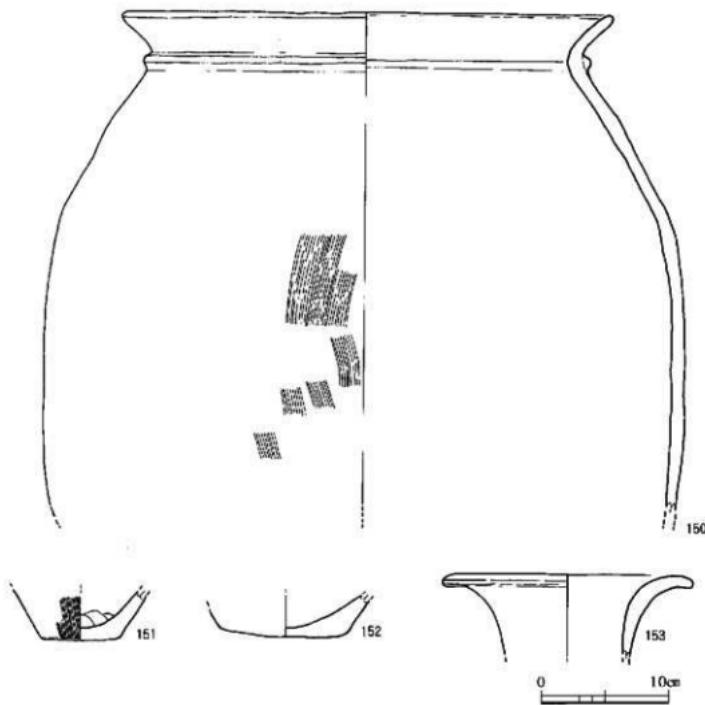
標高の高い調査区北側には中世の遺構が分布する。その中で、地形の変換点に沿うように平行に走るSD03とSD04は、埋土の状況から水が流れた形跡は認められず、なんらかの区画を示すものと推定される。溝からの出土遺物は少なく、時期の断定はできないが、出土した土師器杯から中世の後半頃と考えられる。その他、ほぼ同時期ではないかと思われる遺構にSK06とSK08がある。SK06はSD04を切っており、SD04より新しい時期であるが、土師器小皿の形態からはさほどとの時期差は認められない。これら土壙の性格は明らかではないが、SD03、SD04から北側を中心に中世後半期の遺構が分布し、集落の一端を形成していたといえる。周辺の調査では、第1次調査地点で15世紀～16世紀頃の中世城が検出されている。この地点は席田青木遺跡群が立地する小丘陵の北端であり、丘陵の麓に集落の存在が想定される。第2次調査地点からは当該時期の遺構は検出されていないが、本



第13図 包含層出土遺物実測図3 (1/4)



第14図 包含層出土遺物実測図4 (1/4、1/3)



第15図 包含層出土遺物実測図5 (1/4)

調査地点の北側、丘陵麓の南側に集落の中心が広がるのではないかと思われる。

調査区の南側は低くなり冲積地となる。SD02が調査区中央に流れ、その両サイド及び調査区南側に包含層が堆積している。溝は調査区東端側は底面が粗砂層となっていた。本来河川が流れしており、その上層に溝が掘り込まれたと考えられる。溝の埋土・上層出土の遺物と粗砂出土遺物との間に時期差は見られなかった。土器の器種としては、大型甕、大型壺、甕、壺、鉢、高杯、器台、ミニチュア土器がある。甕や壺の形態から弥生時代終末期と考えられ、一部混入もみられるものの、一括性の高い遺物と思われる。

包含層からはさらに大量の遺物が出土している。包含層というより土器窯とした方が適切かもしれない。包含層Bと包含層Cは便宜的に分けたが本来は一連の広がりを持つものと推定される。甕、大

壺甌、壺、鉢、高杯、器台、ミニチュア土器が出土している。特に複合口縁甌と器台、ミニチュア土器の出土量が多い。包含層の堆積は弥生時代後期後半～終末の時期と推定される。つまり、包含層が堆積した直後溝が掘削されたと考えられる。また、溝、包含層とともにミニチュア土器が出土していることから、出土遺物が単なる廃棄の産物ではなく、祭祀的行為の結果であることを示している。同時に造構はSE03のみであり、他に住居や掘立柱建物等は検出されていない。集落の中心ではないが、井戸があることから近辺に当該時期の集落が存在していることが推定される。ここで周辺の調査地点に目を向けてみると、まず、第2次調査地点で弥生時代後期後半の溝、土壤が検出されている。しかしながらこの地点も造構は少なく集落の中心とはいえない。ここは弥生時代中期後半を主体とする焼粘釜が分布する丘陵の頂部から南に下った谷部である。この谷部から本調査地点の間に弥生時代後期後半～終末にかけての集落が存在するのであろう。そこで第3次調査地点を見てみると、弥生時代終末～古墳時代前期の造構が集中しており、集落の中心に近いと考えられる。第3次調査地点付近を中心として、当該時期の集落が展開し、その一端が本調査地点に現れているのであろう。本調査地点から出土した大量の土器、ミニチュア土器の存在から、集落になんらかの特殊性を想定することもできる。

以上、本調査地点で検出された造構の性格について考察を加えた。造構は少なく、本調査地点のみで席田青木遺跡の様相を伺うことはできないが、久保園遺跡や月隈丘陵に分布する他の遺跡群とともに、遺跡の動態や性格について今後明らかにしていくことが必要であろう。

表1 造構一覧表

探査	造構	長 軸(m)	短 軸(m)	深 さ(m)	出土遺物番号	時 期
第6回	SK01	0.74	0.7	0.96	49~51	弥生終末?
第7回	SK06	3.36	1.86	0.34	52~54	15世紀頃
第7回	SK08	0.8	0.57	0.19	55	中世後半
第7回	SP29	0.37	0.37	0.12	56~57	
探査	造構	長 軸(m)	幅 (m)	深 さ(m)	出土遺物番号	時 期
第4回	SD02	9.14	1.24~5.95	1.24~5.95	1~42	弥生終末
第5回	SD03	11.7	1.8~2.55	1.8~2.55	45	中世後半
第6回	SD04	12.8	0.5~1.55	0.5~1.55	46~48	中世後半

表2 出土酒物一览表

図版1



2. 調査区北側全景(南北5m)



1. 調査区南側全景(南北5m)

図版2



1.SD02包含層(北から)



2.SD02包含層(北東から)



3.SE01(西から)



4.SD03・SD04(北から)

図版3



1. SD04(西から)



2. SD03(西から)



3. SK06(北から)



4. SK08(南西から)



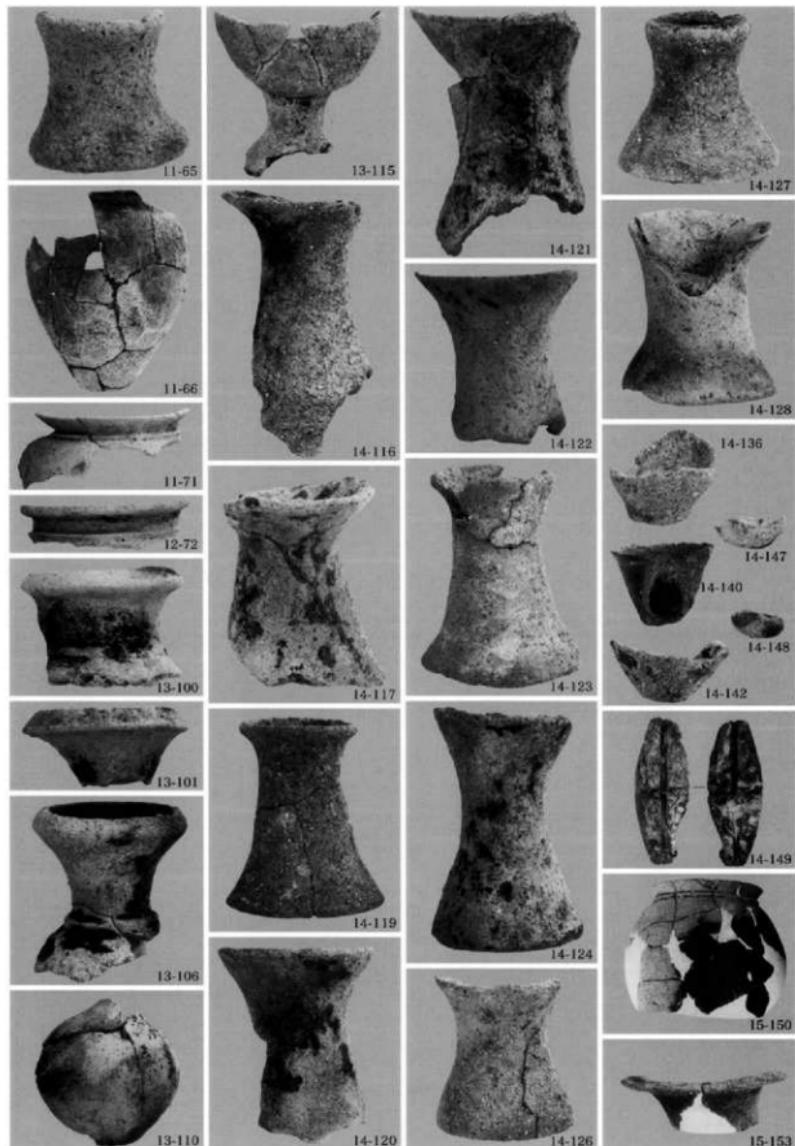
5. SP29(南西から)

図版4



出土遺物1

図版5



出土遺物2

福岡市埋蔵文化財調査報告書第712集
久保園遺跡2・席田青木遺跡4

-空港線関係埋蔵文化財発掘調査報告書-

2002年(平成14年)3月29日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印 刷 川辺印刷有限会社
福岡市南区高宮1丁目7-19

